

令和2年度国庫補助事業

芦屋市内遺跡発掘調査報告書

寺田遺跡（第254地点）

2023年3月

芦屋市教育委員会

令和 2 年度国庫補助事業

芦屋市内遺跡発掘調査報告書

寺田遺跡（第 254 地点）

2023 年 3 月

芦屋市教育委員会



西区西壁土層（北東から）



東区 SH01 カマド土器出土状況（西から）



20

SH01 出土土師器甕



24

SH01 出土須恵器甕



25

SH01 出土須恵器甕



23

SH01 出土須恵器甕



47

SH01 出土カマド支脚石

※写真中の番号は、報告番号である。

※ 20・23・24・47 は、SH01 カマド出土である。

※ 47 のカマド支脚石は、花崗岩であるが、被熱によって全体が赤化しており、石肌は荒れている。

例 言

1. 本書は、芦屋市教育委員会が令和2年度国庫補助事業として実施した市内遺跡発掘調査の報告書である。また、令和4年度国庫補助事業として報告書（本書）作成を実施した。調査費および遺物整理費は、令和2年度が3,400,000円、令和4年度が3,162,000円で、国1／2、県1／4、市1／4の補助率である。
2. 本書収載の遺跡は、令和2年度に本発掘調査を実施した寺田遺跡第254地点である。
3. 当該調査は、芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課が調査主体である。同課文化財係長（学芸員）竹村忠洋、同係学芸員森山由香里、同係会計年度任用職員2級（学芸員）白谷朋世・西岡崇代が担当し、同係会計年度任用職員1級小林久実代・小林宣子・田中菜美が補助した。
4. 本書の編集は西岡が担当し、白谷が補佐した。
5. 報告文の執筆は、西岡・竹村が行った。執筆分担については、目次に氏名を掲げた。
6. 本書での方位は、真北を用いた。真北は磁北より6° 40′ 東に振っている。標高は、東京湾中等潮位（T. P. ）で表示している。
7. 標準土色帖で判定した褐色の「褐」字は、本書では「褐」を代字で使用した。
8. 本書を作成する上で、引用および参照した文献は、キッコウ括弧で表記する。なお、発行機関が教育委員会の場合は、「教委」と省略して記す。また、巻末には引用・参照文献と芦屋市文化財調査報告目録を集約している。

目 次

巻頭図版

例 言

目 次

第 1 章 はじめに

第 1 節 国庫補助事業の概要……………	(竹村忠洋) ……	1
第 2 節 埋蔵文化財の保護について……………		2
第 3 節 調査体制……………		2
第 4 節 分布調査の結果について……………		2

第 2 章 令和 2 年度の発掘調査

第 1 節 寺田遺跡第 254 地点の調査……………	(西岡崇代) ……	4
1. 地理的・歴史的環境		
2. 調査に至る経緯		
3. 発掘調査の方法		
4. 発掘調査の経過		
5. 基本土層		
6. 遺構		
7. 遺物		
8. まとめ		

引用・参照文献目録

芦屋市文化財調査報告目録

写真図版

報告書抄録

第1章 はじめに

第1節 国庫補助事業の概要

芦屋市は、兵庫県の南東部に位置する阪神間の住宅都市である（第1図）。市域の形状は南北に細長く、その規模は東西約2.5km、南北約8.3km、面積18.57km²を測る。市域の地形は六甲山地と大阪湾に挟まれ、山地・丘陵・台地・段丘・沖積扇状地・沖積低地・砂州・浜堤・砂浜が形成されている。市域を流れる主要な河川には、芦屋川と宮川がある。現在の市街地は、六甲山地南麓の台地・丘陵部と神戸平野とも呼称される東西に細長い平野部を中心に形成されている。市の人口総数は、令和5年（2023）3月1日現在、93,680人となっている。狭隘な平野部には、阪急電鉄神戸線、J R東海道本線、国道2号線、阪神電鉄本線、国道43号線、阪神高速国道3号神戸線・5号湾岸線が並行して通っており、東西交通の要衝となっている。そして、平成22年（2010）10月24日には、都市計画道路山手幹線が開通した。

このように本市は自然環境に恵まれ、交通の要衝であることから、市内に後期旧石器時代から近世までの各種類の遺跡が数多く分布しており、これらは埋蔵文化財包蔵地として周知している（第4図）。

芦屋市では、これらの埋蔵文化財を保護するために包蔵地範囲内で開発が実施される際に文化財保護法第93条並びに第94条の規定に基づき事前に確認調査を実施し、埋蔵文化財が損壊を受ける場合は本発掘調査を実施し、埋蔵文化財発掘調査報告書を刊行することによって記録保存を公表している。その際、確認調査および個人住宅の建設に伴う本発掘調査は、原則的に国庫補助事業として国費・県費・市費により実施している。本書では芦屋市教育委員会が令和2年度に実施した市内遺跡の発掘調査の概要を報告する。事業は令和2年度国宝重要文化財等保存整備費補助金として実施し、当該年度の補助対象経費は3,400,000円で、補助率は国1／2、県1／4、市1／4、補助金の確定額は国費1,700,000円、県費850,000円、市費850,000円である。

令和2年度の国庫補助事業の対象となった発掘調査は、本発掘調査1件、確認調査8件である。具体的には、本発掘調査が寺田遺跡第254地点の1件、確認調査が業平遺跡第95地点、寺田遺跡第254地点、四ツ塚第13地点、四ツ塚第14地点、冠遺跡第29地点、三条九ノ坪遺跡第51地点、月若遺跡第140地点、芦屋廃寺遺跡第157地点の8件である。これらの調査の概要を述べると、寺田遺跡第254地点の本発掘調査で



第1図 兵庫県と芦屋市の位置

第1章 はじめに

は、本書で報告するとおり、遺構面を3面検出し、第1遺構面では中世(鎌倉時代前半)の柱痕を有するピット9基、第2遺構面では古墳時代中期の竪穴住居跡1棟、第3遺構面では弥生時代後期の遺構等を検出した。冠遺跡第29地点の確認調査では平安時代のピットおよび遺物包含層を確認したが、工事による影響がないと判断し、指示事項を「慎重工事」とした。三条九ノ坪遺跡第51地点の確認調査では弥生時代後期の遺物包含層を確認したが、工事による影響がないと判断し、「慎重工事」とした。その他の確認調査では、工事掘削深度において埋蔵文化財が確認されなかったため、「慎重工事」とした。

本書では、令和2年度に国庫補助事業として実施した発掘調査の内、寺田遺跡第254地点の本発掘調査について報告する。

第2節 埋蔵文化財の保護について

芦屋市内における埋蔵文化財の保護手続きについて、令和2年度では文化財保護法第93条第1項および第94条第1項の規定に基づき、事業者から提出された周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等に伴う届出や通知の件数は49件であった。それらに伴い実施された発掘調査の件数は合計9件であった。調査種別では、本発掘調査1件(寺田遺跡第254地点)、確認調査8件、分布調査9件であった。

なお、令和2年度における本市生涯学習課への埋蔵文化財包蔵地に関する照会は187件、開発指導等事前協議は39件であった。

第3節 調査体制

令和2年度の本市の埋蔵文化財専門職員数は、正規職員2名(学芸員)、会計年度任用職員2級2名(学芸員)の合計4名であった。

令和2年度の埋蔵文化財保護事業は、以下の体制で実施した。

芦屋市教育委員会	教育長	福岡憲助
社会教育部	部長	田中 徹(～10/16)
		中西 勉(10/17～)
生涯学習課	課長	長岡良徳
文化財係	係長	竹村忠洋(学芸員)
	学芸員	森山由香里
会計年度任用職員(2級)		西岡崇代(学芸員)
		白谷朋世(学芸員)
会計年度任用職員(1級)		小林久実代
		小林宣子
		田中菜美(10/1～)
		水谷千賀子(～8/31)

第4節 分布調査の結果について

本章第2節に記したとおり、令和2年(2020)度には分布調査を9件実施しているが、ここでは、その内、徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群第245地点で確認した矢穴石1石について報告する。

当調査地(芦屋市六麓荘町31番3。約850㎡)では、木造1階建個人住宅の新築計画が持ち上がったが、周知の埋蔵文化財包蔵地であるため、文化財保護法第93条に伴う発掘届出書が地権者より芦屋市教育委員会生涯学習課へ提出された(令和2年4月1日付、芦教生第29号)。そこで、芦屋市教育委員会では工事による埋蔵文化財への影響の有無を確認するために、事前に分布調査を実施した。その結果、敷地北西部の隣地境界に設けられた石垣内に取り込まれるような状態の矢穴石1石を確認した(第2・3図)。

当矢穴石の規模は、長さ265cm以上、幅140cm以上、高さ155cm以上を測る。当矢穴石の上面には並行分割技法(羊羹割技法)を行うために2本の矢穴列が設けられている。その内の1列は10個の矢穴からなり、それらはすべて完存している。もう一方の矢穴列は15個の矢穴からなるが、いずれもすでに半裁された矢穴痕である。

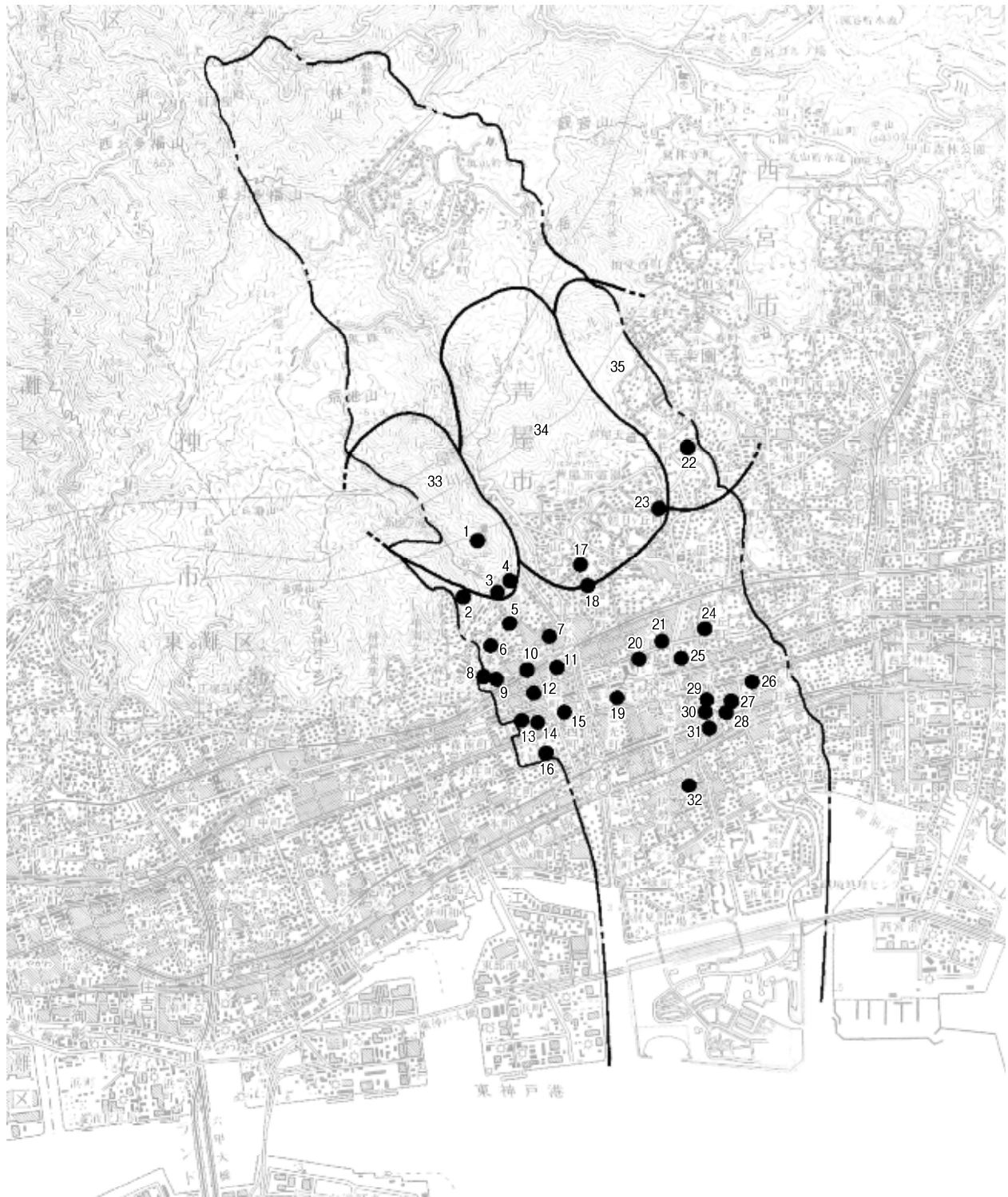
今回の工事では、この矢穴石に影響がないと判断できたため、埋蔵文化財の取扱いは「慎重工事」とした。



第2図 岩ヶ平刻印群第245地点矢穴石(1)



第3図 岩ヶ平刻印群第245地点矢穴石(2)



- | | | |
|------------|-------------|----------------------|
| 1 城山遺跡 | 13 六条遺跡 | 25 久保遺跡 |
| 2 会下山遺跡 | 14 清水遺跡 | 26 堂ノ上遺跡 |
| 3 山芦屋遺跡 | 15 前田遺跡 | 27 金津山古墳 |
| 4 城山・三条古墳群 | 16 津知遺跡 | 28 小松原遺跡 |
| 5 冠遺跡 | 17 芦屋神社境内古墳 | 29 打出小槌古墳 |
| 6 三条会下遺跡 | 18 藤ヶ谷遺跡 | 30 打出小槌遺跡 |
| 7 西山町遺跡 | 19 業平遺跡 | 31 若宮遺跡 |
| 8 三条岡山遺跡 | 20 船戸遺跡 | 32 呉川遺跡 |
| 9 三条九ノ坪遺跡 | 21 打出岸造り遺跡 | 33 徳川大坂城東六甲採石場城山刻印群 |
| 10 芦屋庵寺遺跡 | 22 八十塚古墳群 | 34 徳川大坂城東六甲採石場奥山刻印群 |
| 11 月若遺跡 | 23 朝日ヶ丘遺跡 | 35 徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群 |
| 12 寺田遺跡 | 24 阿保親王塚古墳 | |

第4図 芦屋市内主要遺跡分布図 1 / 50000

第2章 令和2年度の発掘調査

第1節 寺田遺跡第254地点の調査

1. 地理的・歴史的環境

寺田遺跡は、芦屋市三条町・三条南町・西芦屋町に所在する、複合遺跡である（第1図）。本遺跡は、芦屋川右岸の扇状地および扇状地間低地に立地し、標高16～26mを測る緩傾斜地の東西約400m、南北約300mに広がる。月若遺跡・芦屋廃寺遺跡・三条九ノ坪遺跡と隣接し、市内において遺跡の密集度が高い地域である。

本遺跡は、昭和35年（1960）の市道敷設工事の際に、土器が出土したことで、遺跡の存在が明らかになった。昭和59年（1984）の発掘調査（寺田遺跡第1地点）〔古代学協会1985〕以来、数多くの調査が実施されており〔第39・43・45・47・59・62集など〕、令和5年（2023）1月31日現在の調査地点数は、270地点となっている（本発掘調査、確認調査、工事立会、慎重工事を含む）。

また、阪神・淡路大震災後の復旧・復興調査と、平成12～21年度に実施した、都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査において、多くの知見を得ることができた。さらに、近年は山手幹線周辺の開発によって、本地点も含めて発掘調査が散発的に実施されている。

寺田遺跡は、既往調査の成果により縄文時代後期から江戸時代の遺構・遺物が検出され、時代によって遺構の分布域が大きく変動していることが、明らかになっている。弥生時代前期については遺跡西部に、弥生時代中期頃は遺跡北部から中央部において、集落が盛行する傾向があり（第55・95・127・137・142・168・178地点）、自然流路や溝、土坑など、多様な遺構が多く検出されている。弥生時代後期前半になると、遺構や遺物の検出例はわずかに減少傾向をみせるが、弥生時代後期後半になると遺構数が増加し、方形を呈する竪穴住居跡も多く確認されている。

古墳時代では、掘立柱建物跡や造り付けカマドをもつ方形の竪穴住居跡が、遺跡中央部～東部の範囲で検出されている（第55・95・127・130・132・139・178地点）。中期には韓式系土器の系譜を引く土器が出土することと合わせて、渡来系の人々の存在が想定できる。また、市域最大の須恵器甕や滑石製紡錘車（第139地点）など、特徴的な遺物も出土している。

古代になると、遺跡中央部を中心として水害を受けない場所を選んで、掘立柱建物が多数建ち並んだようである（第1・90・127・152・168・178地点）。第55地点では、高句麗系軒丸瓦等をはじめ、寺田遺跡の北東に位置する芦屋廃寺遺跡とのつながりを想定させる

遺物が出土している。第90地点からは、墨書土器や土馬などが出土している。芦屋市指定文化財である墨書土器は、「大領」「少領」と書かれたものを含んでおり、「大領」「少領」は郡司の長官と次官を指していることから、菟原郡衙との関わりが考えられている。

平安時代では、第1地点において、前期の総柱建物跡数棟が検出され、中には、直径0.3m大の柱根が残存する柱穴もあった。また、皇朝十二銭である和同開珎も出土しており、これらの建物は官衙的性格をもつと考えられる。第133地点では、平安時代の掘立柱建物跡が検出されており、この付近を中心に、奈良時代から平安時代まで、集落が営まれていたことがわかる。

平安時代末から鎌倉時代初めにも多くの掘立柱建物跡が確認されている。第139地点からは、在地の東播系須恵器鉢とともに日宋貿易によってもたらされた、黄釉鉄絵陶器盤（芦屋市指定文化財）が、掌大に割られて埋納されていた。

今回の調査地に南接する第127地点では、計3面の遺構面が確認されている（第2図）。上から、第1遺構面（奈良時代を主体として中世まで）、第2遺構面（古墳時代中期後半頃から飛鳥時代）、第3遺構面（弥生時代中期頃から古墳時代）で、多くの遺構・遺物が確認されている。第1遺構面では、奈良時代や中世の掘立柱建物跡が検出されており、中でも、奈良時代の掘立柱建物跡S B 101とS B 103が特筆される。S B 101は東西3間（5.4m）×南北5間（10.0m）、S B 103は東西3間（6.0m）×南北5間（11.0m）を測る建物である。両遺構は、ほぼ南北方向を指向する建物で、東西に並列する。ともに、柱穴掘形は方形を呈し、約1mと大型である。S B 103には、0.25～0.30mを測る柱痕が残っていた。このS B 101とS B 103との間で検出されたS X 104では、奈良時代初頭の土器器・須恵器がまとまって確認された。中には、転用硯や塀もみられる。また、S X 104の北東に位置する、平安時代の遺構（S X 103）からは土師皿のみが多量に出土しており、祭祀に関連する遺構と考えられる。



第1図 調査地位置図 1／2500(数字は既往調査地点)

第2遺構面では、古墳時代中期後半頃から飛鳥時代の居住域が確認されている。竪穴住居跡は、古墳時代中期後半頃（S B 201）と古墳時代後期末頃（S B 202）の2棟を検出している。2棟ともに、支脚の礫を伴うカマドを有していた。また、S B 202の東側では飛鳥時代頃の掘立柱建物跡もみられた（S B 203～205）。S B 203は、東西3間（4.2 m）×南北2間（3.5 m）以上、S B 204は、東西3間（4.5 m）×南北2間（5.1 m）、S B 205は、東西2間（4.0 m）×南北4間（6.8 m）である。S B 203～205の柱穴掘形は、不整円形や不整形方形を呈するものが多いが、柱痕は確認できなかった。

第3遺構面では、古墳時代前期初頭頃の竪穴住居跡5棟（S B 301～304・306）と、本来は第2遺構面

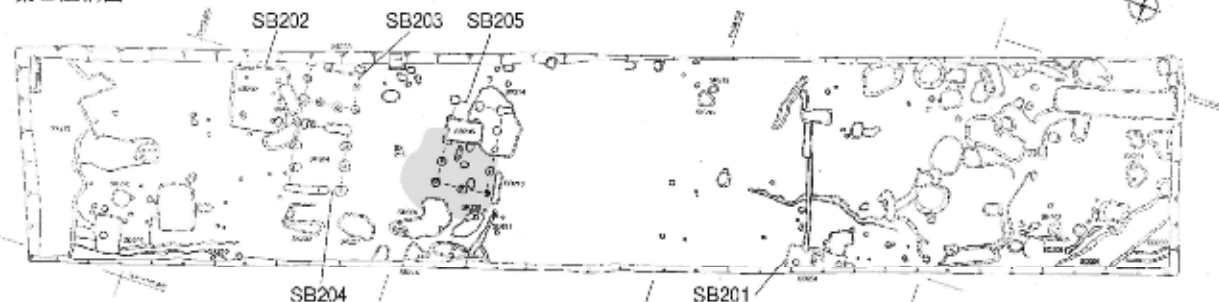
に属すると考えられる、古墳時代中期の竪穴住居跡2棟（S B 305・308）が確認されている。S B 302は遺存状態が良好で、中央土坑には焼土を含む。S B 303からは、支脚と推定される円筒状の土製品がみつっている。S B 308は、支脚に土師器高杯を使用したカマドを有しており、カマド周辺の壁際から、土師器の甕や甔などが出土している。また、この住居では、カマド補修用などの粘土塊もみつっている。他にも、掘立柱建物跡（S B 307）や、弥生時代中期前半の壺や甕、大型の砥石を検出した土坑（S K 368）、弥生時代終末期から古墳時代前期の土器が出土している溝（S D 301）が確認されている。

このような中、今回の調査地点は寺田遺跡の分布範囲のほぼ中央部に位置している。

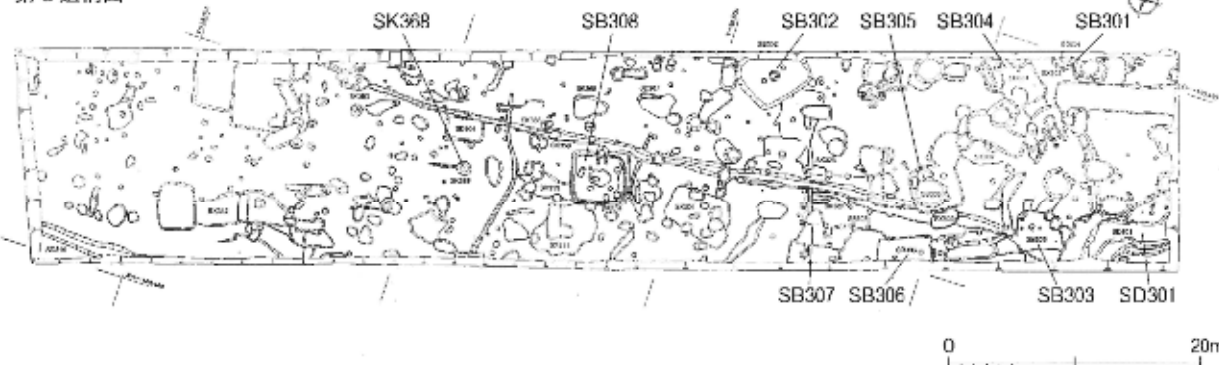
第1遺構面



第2遺構面



第3遺構面



第2図 寺田遺跡第127地点遺構面平面図 1/600（芦屋市文化財調査報告第43集より引用・一部改変）

2. 調査に至る経緯

芦屋市西芦屋町25番4に所在する当該地において、木造地上2階建個人住宅の新築計画が進捗した。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である寺田遺跡の分布範囲内であることから（第1図）、文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘届出書が、令和2年（2020）6月24日付（7月21日に再提出）で地権者より本市教育委員会に提出された。

本市教育委員会では、受理した埋蔵文化財発掘届出書をもとに、建築計画と周辺で実施した既往調査との関係を照合した結果、確認調査が必要と判断した。そこで、埋蔵文化財の有無や工事の影響等を確認するため、生涯学習課文化財係長（学芸員）竹村忠洋、同係学芸員森山由香里、同係会計年度任用職員2級（学芸員）白谷朋世を調査担当者として、7月16日に確認調査を実施した。

確認調査は、調査地北東部に東西約1.5m、南北約1.5mの正方形のトレンチ1（約2.25㎡）と調査地南西部に東西約4.0m、南北約2.0mの長方形のトレンチ2（約8.0㎡）の計10.25㎡を設定し（第3図）、現地地表下約1.4mまで掘削した。その結果、柱痕を有する掘立柱建物跡やピットを伴う遺構面、遺物包含層を確認したため、工事によって損壊する部分を対象とした本発掘調査が必要と判断した。

そこで、8月17～29日にかけて、竹村・森山・白谷を調査担当者として、本発掘調査を実施した。

発掘作業は、株式会社島田組に委託した。

3. 発掘調査の方法

発掘調査は、令和2年（2020）8月17～29日の実働12日間で行った。残土を場内処理しなければならなかったため、調査区を西区と東区に区分し掘削した（第3図、図版1）。まず、西区の調査から始め、その後、反転掘削して東区の調査を行ったが、土量の関係で南東区に分けた。

掘削方法は、第7層までを0.1㎡バックホーで掘削し、第8層以下を人力で掘削した。調査区の掘削深度は、遺物包含層や遺構の深度を考慮して、現地地表下約1.5～1.8mとした。調査区掘削後は、壁面の土層を分層し、写真撮影を行い、土層断面図（縮尺1/20）を作成した。また、光波測距器を用い、調査区配置図（縮尺1/100）および遺構面平面図（縮尺1/20）、遺物出土状況図（縮尺1/10）を作成し、記録した。なお、調査区配置図・遺構面平面図の作成にあたっては、調査区の形態に合わせて任意の基準線を設定し、平面測量における基準線は、すべてこれを使用した。記録に用いる基準高は、本市道路課設置のマンホール上面基準高（T. P. 25.06 m：本市下水道台帳図記載）より、

水準測量を行った数値を用いた。

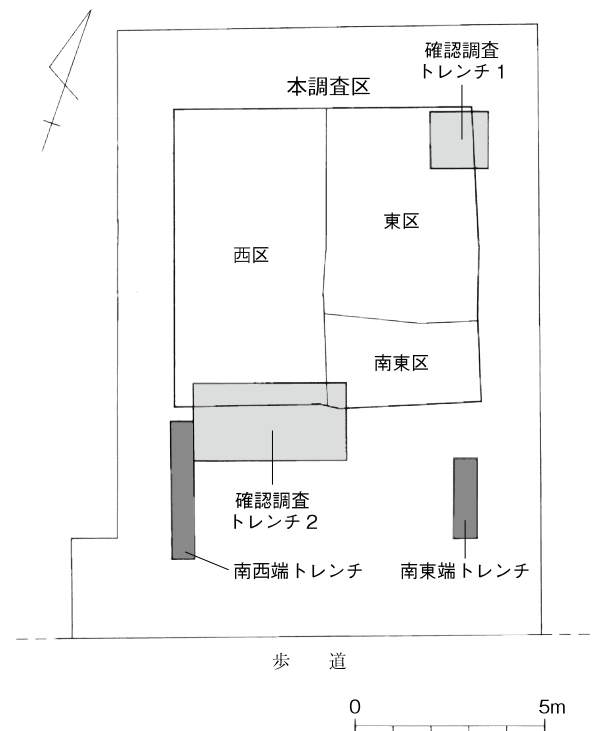
写真による記録は、デジタルカメラ（1000万画素）を使用した。

すべての記録を終了した後、重機により調査区を埋戻し、現状復旧した。

4. 発掘調査の経過

発掘調査は、令和2年（2020）8月17日に機材や重機を搬入して、開始した。まず、提出された工事図面を基に調査区を設定し、残土処理の関係で西区・東区に分けて調査を進めることにした。8月18日には、西区の掘削を開始した（第4図）。重機掘削が終わった西区南側に、土層観察用の深掘トレンチを採入する。また、西区の西端と北端にサブトレンチを設定した。8月19日は、重機掘削と人力掘削を併用して、第8層上面で第1遺構面を検出した。北壁・西壁の土層を分層し、写真撮影を行った後、第1遺構面平面図等を作成した。8月21日には、人力掘削により第8層を除去し、第2遺構面（第10層上面）を検出する。次いで、第10層を除去して、第3遺構面（第11層上面）を検出した。但し、北部は地形の高低差の関係から、第2遺構面と第3遺構面との検出レベルが変わらず、同時に第2・3遺構面を検出した形になった。北側に、炭化物を含む遺構を確認する。各遺構面の平面図・遺物出土状況図の完成後、写真撮影を行い埋戻した。

8月24日から東区（南寄りを除く）の掘削を開始する（第5図）。北端と東端にサブトレンチを設定し、



第3図 調査区配置図 1/200

西区との土層の対応関係を確認しながら、北壁の分層を行い、土層断面図の作成に取りかかる。また、第1遺構面を確認し、不明瞭な部分は段下げを行って、遺構を検出した。第1遺構面平面図の作成と写真撮影を行う。8月26日には、第2遺構面を確認した。西区北側で確認していた炭化物を多く含む土層は、カマドを伴う竪穴住居跡の範囲であることが判明。東区南寄りは西区の土層観察から、第3遺構面の基盤層である第11層上面まで掘り下げ、遺構を検出した。8月27日、記録・写真撮影が終了した東区を埋戻した後、残土処理の関係から未調査だった、南東区の調査を始める。第1遺構面を検出し、記録・写真撮影を行い、第2遺構面と第3遺構面の検出を進める。8月28日は第2遺構面と第3遺構面の記録・写真撮影を行い、終了後埋戻す。8月29日には工事影響部分にあたる調査区南西端と南東端に、各々トレンチを1基設定し(第3図)、土層・遺構の確認を行った。その後、埋戻した後、機材を撤収し、調査を終了した。

5. 基本土層

本発掘調査では、西区西壁土層を基準とした(第6図、巻頭図版1)。但し、確認調査時の層序(第1～10層)と対応させて、本発掘調査で新たに確認した土層(第11・12層)を追加した。また、確認調査時と本発掘調査時で対応する層に若干の土色・土質に差異があるものは、新たにアラビア数字の後にアルファベットの小文字を付し、細分した。なお、土層断面図に記載はないが、深掘トレンチで確認した土層(第13～16層・図版2)も提示している。一方、遺構の埋土等については、丸囲い数字を付した。各層の観察所見は、以下のとおりである。

- 第1層 現表土・近現代の攪乱を含む
- 第2層 灰色粘性砂質土(旧耕作土)
- 第3層 淡灰褐色砂質土(旧耕作土)
- 第4層 橙褐色砂質土
- 第5層 淡灰色砂質土



第4図 西区調査風景

- 第6層 灰褐色砂質土(稀薄な遺物包含層)
- 第6a層 灰褐色砂質土(確認調査時の第6層と対応)
- 第6b層 褐色砂質土
- 第7層 褐色砂礫土
- 第8層 褐色砂質土(やや不均質・当層上面が第1遺構面)
- 第9層 黒色砂質土
- 第9a層 褐灰～灰色砂質土
- 第9b層 暗褐灰～褐灰色砂質土
- 第9c層 灰色砂質土(第11層粒粒子は粗くないが、粗砂を含む)
- 第9d層 褐灰色砂質土(土質は第12層に似る)
- 第10層 暗灰色砂質土(当層上面が第2遺構面)
- 第10a層 暗褐灰色砂質土
- 第10b層 灰褐～灰色砂質土
- 第10c層 灰色砂質土
- 第11層 褐色粗砂(ラミナがみられる自然堆積層・当層上面が第3遺構面)
- 第12層 淡黄褐色細粒砂(自然堆積層)
- 第13層 黄灰色シルト(自然堆積層・第12層類似層)
- 第14層 黄褐色中粒砂(自然堆積層・第12層類似層)
- 第15層 暗黄灰色砂質土(自然堆積層)
- 第16層 黄褐色砂礫(自然堆積層)

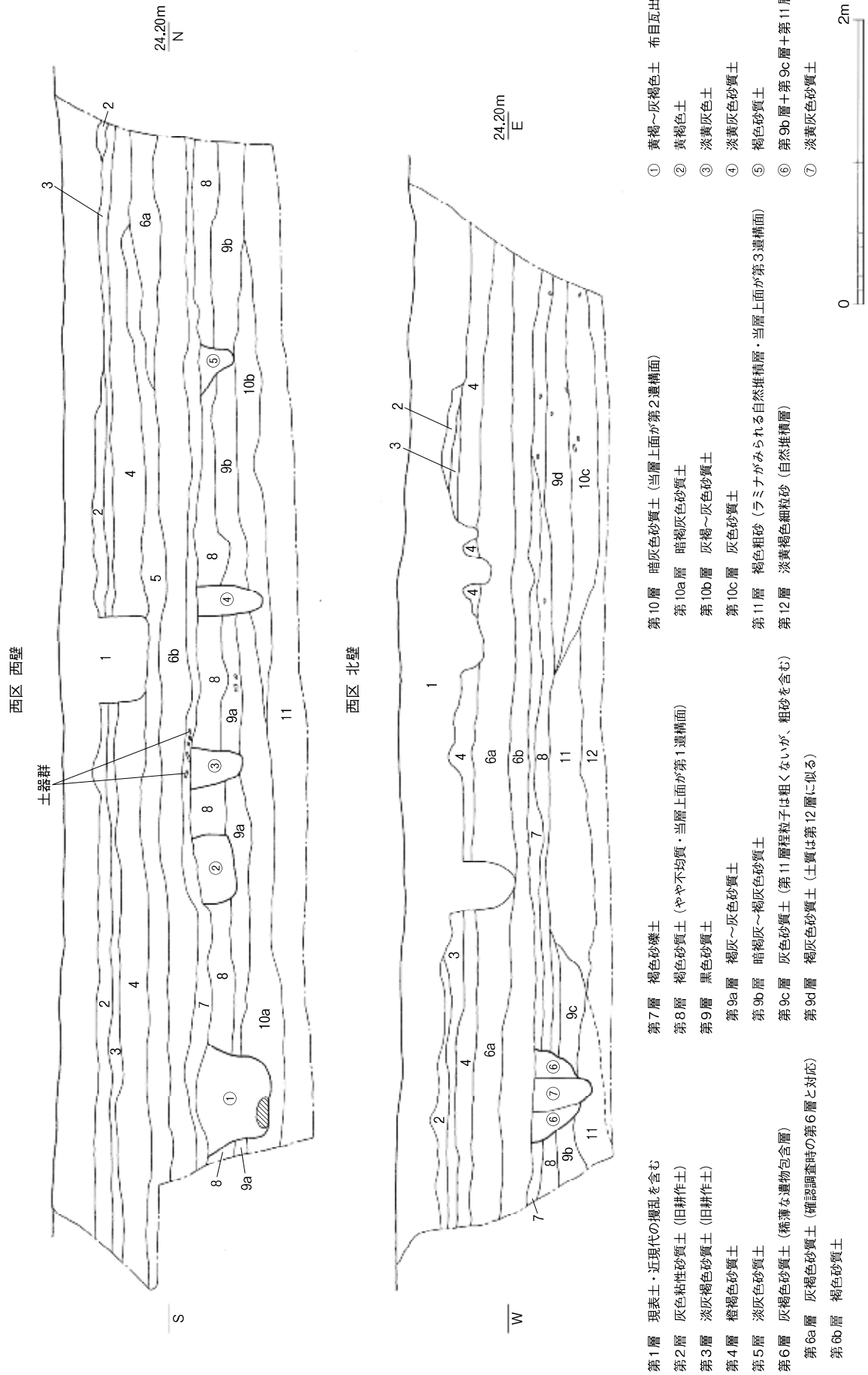
6. 遺構

概要 今回の調査では、合計3面の遺構面を確認した。上から順に、第8層上面を「第1遺構面」、第10層上面を「第2遺構面」、第11層上面を「第3遺構面」と呼称した。但し、調査区の地形が北から南に下る緩傾斜地であったため、層界のレベルや層厚が一定ではなかった部分もある。そのため、調査区北寄りに関しては、同一遺構面で第2遺構面と第3遺構面に属する遺構を検出している。したがって、本書作成時には遺構出土遺物の様相等から年代を判断し、該当遺構を各遺構面に割り振って報告している。

遺構番号は、確認調査で検出した遺構と本発掘調査



第5図 東区調査風景



第6図 西区西壁・北壁土層断面図 1 / 40

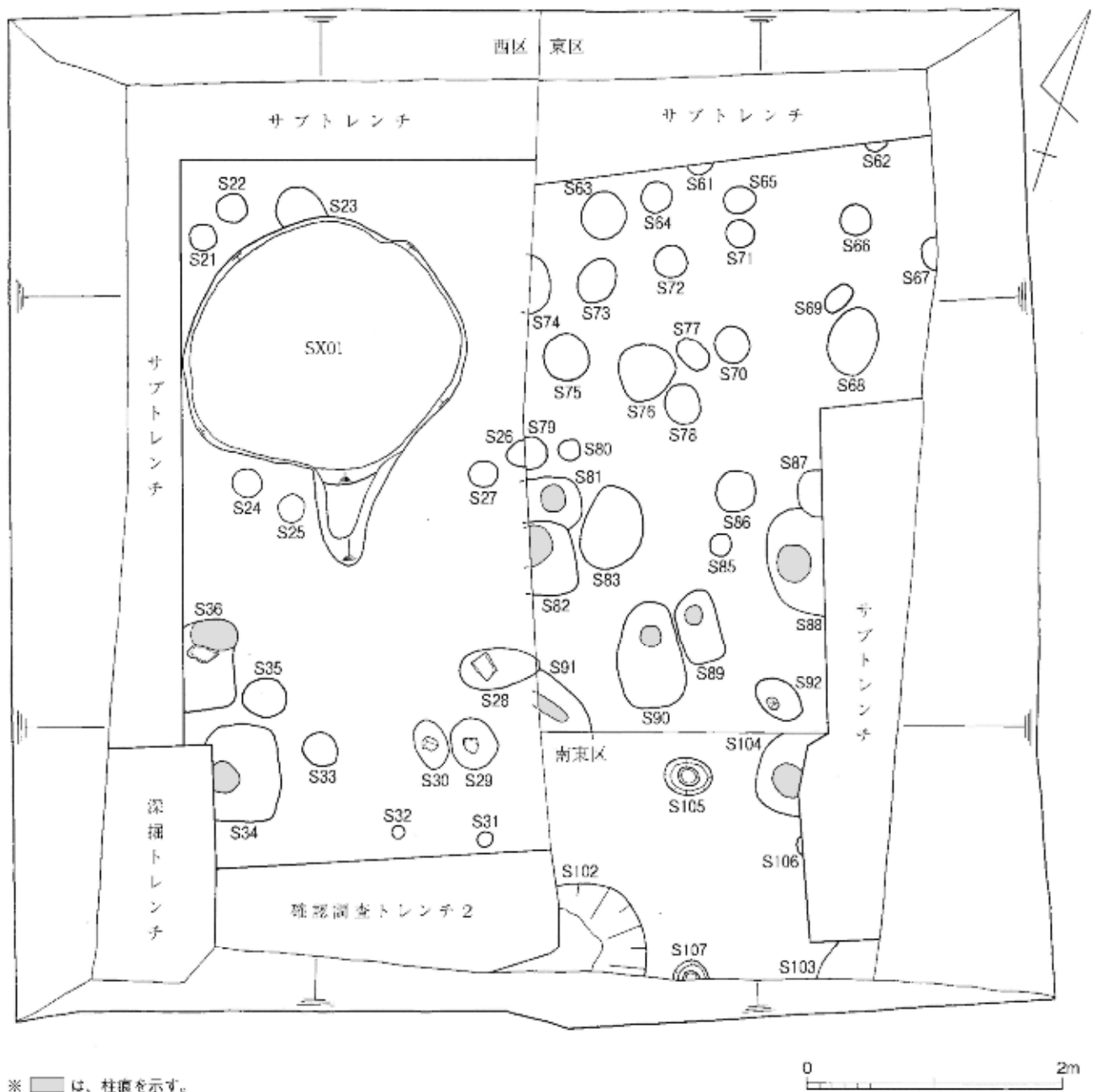
で検出した遺構とを区分するため、本発掘調査の遺構は21番から付した。また、調査区を西区と東区・南東区とで反転掘削して調査を行ったため、遺構面ごとの遺構番号が通し番号になっていない。なお、今回の調査地点では、遺構の形態や性格に関わらず、「S1」、「S2」、「S3」…といった遺構番号を付した。

西区北部は近現代の井戸跡(SX01と呼称)によって攪乱を被っているため、遺構の損壊が著しかった。このことから、第2遺構面検出時にSX01周辺に炭化物が広がる遺構を確認したが、大部分がSX01の影響を受けていることに加えて、西区・東区にまたがって遺存していたため、西区調査時には全容が不明であった。このため、反転掘削後、遺構の検出状況等

から堅穴住居跡と判断し、SII01と呼称した。

第1遺構面 第1遺構面では、ピット52基(S21～36・61～92・102～107)を検出した(第7図、図版3～5)。この内、S26とS79は同一遺構と認識している。なお、S84は欠番とした。

検出したピットの平面形態は、大半が円形を呈している。法量は、直径20～40cmを測るものが多いが、直径65～70cm以上のものもわずかにみられる(S83・102)。また、直径10cm前後の杭列と考えられるピットも検出している(S31・32)。これらの中には、遺物が出土しているピットもあり、罌種・種別は土師皿(第11図1・3・6～8)・瓦器椀(第11図2・10・11)が多い。また、S105からは、青白磁合子(第



第7図 第1遺構面平面図 1/50

11 図 12) が出土している。

さらに、柱痕を有するもの 9 基 (S 34・36・81・82・88～91・104) は、平面形態が隅円方形を呈しており、調査区南部に偏る。これらは調査区外に延びるものが多いが、おおよそ一辺 60～80cm と推定することができ、柱痕は直径 15～30cm を測る。埋土の色調は、掘形が暗灰褐色、柱痕が黄褐～灰黄褐色を呈するものが多い。この内、S 34 の柱痕からは残存率の高い瓦器碗 (第 11 図 2)、S 36 の柱痕からは、蓮弁文のみられる青磁碗 (第 11 図 5) が出土している。また、S 36 は、底面に根石と考えられる石材も確認できた (図版 4)。S 34・36 の柱痕はともに、深さ約 40cm を測る。柱痕を有する 9 基のピットの中には、掘立柱建物を構成するものが含まれていると推測されるが、建物は復元できなかった。

先述したように、ピットからは、土師器・瓦器・青磁や青白磁などの遺物が出土している。また、西区西壁のみで検出した、第 1 遺構面に伴うと考えられる土器群 1 からは、東播系須恵器 (第 13 図 34) の出土を確認した。これらの遺物の様相から、第 1 遺構面は中世 (主に鎌倉時代前半) の遺構面と判断した。但し、S 27・62～64・68・76・91 に関しては、残存率の高い弥生土器や須恵器が出土していることから、第 8 層下位にあった包含層や遺構に由来すると考える。S 103 からは、弥生土器・土師器・須恵器と共に縄文土器が出土しており (第 11 図 17)、さらに下位の包含層に伴うものと推測する。

第2遺構面 第2遺構面では、カマドを有する竪穴住居跡 1 棟 (S H 01)・ピット 17 基 (S 41～50・93～97・108・110)・土坑 2 基 (S 100・101) を検出した (第 8 図、図版 6・9)。なお、S 37～40 は欠番とした。

S H 01 は、大部分を西区北側で検出した遺構で、一部は東区にも延びる (図版 7)。しかし、概要で述べたように、S H 01 の大部分が S X 01 による攪乱を被っていることや、北辺がサブトレンチ掘削の影響を受けていることにより、全容は不明である。東辺と西辺の一部、および北東隅と南東隅を検出しており、平面形態は隅円方形を呈する。S H 01 の規模は、東西が約 3.1 m、南北約 2.3 m を測り、削平が顕著だったため、壁の残存高は 10～12cm であった。覆土の色調は黒褐色で、炭化物を多く含む。

S H 01 東辺やや南寄りの位置では、カマドを確認した。カマドの残存長は、南北約 95cm、東西約 40cm で、U 字型に遺存した壁体の幅は 10～15cm、残存高 12～15cm、燃焼部南北幅約 47cm を測る。壁体は、表面に赤化している部分があり、被熱痕跡と考えられる。床面からは、少し浮いた状態で、直立する花崗岩礫を検出した (図版 10)。礫の形状は截頭椎体を呈しており、法量は底部一辺約 7cm、上部一辺約 5cm、高さ約 12cm を測る。礫は全体的に赤化しており、特に下部の

被熱痕跡が著しかった (巻頭図版 2 の 47)。また、この礫の上部や周辺には、土師器甕 (第 12 図 20) の底部片が散乱していたが、礫の下に甕の破片は入り込んでいなかった。このことから、礫はカマドの支脚で、その上に土師器甕が設置されていたと考えられる。支脚は、カマドのほぼ中央に据えられていたようで、これより前面では、床面に直径約 10cm、厚さ約 5cm の焼土化している部分が確認できた。

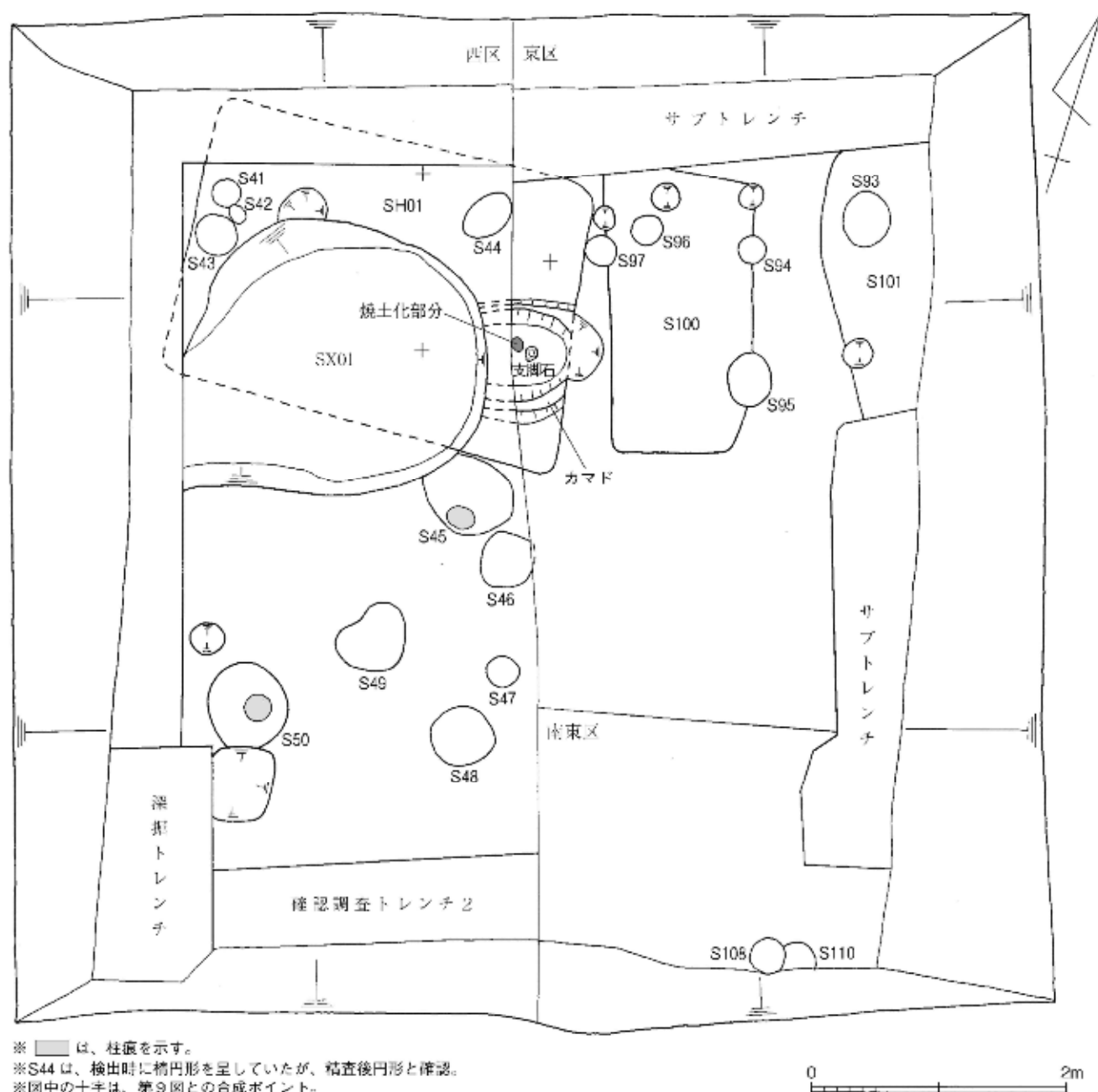
S H 01 内には、4 基のピット (S 41～44) を確認した。S 41～44 は円形を呈しており、法量は直径 15～30cm を測る。遺物は、S 41 からの出土はなく、S 42 は磁器極小片、S 43 は弥生土器もしくは土師器の小片である。S 44 からは後述する S H 01 北東部で出土した、5 世紀代の須恵器の甕 (第 12 図 25) と同一個体の小片や、図化していないが、同じく 5 世紀代と考えられる、須恵器の杯蓋もしくは杯身小片が出土しており、他に弥生土器もしくは土師器の小片も確認できた。また、埋土には炭化物和黄褐色土が一部みられた。このような遺物の様相から、S 42 は支柱穴の可能性は低いが、S 41・43・44 は S H 01 の支柱穴か否か、判断し難い。

S H 01 に伴う遺物として、残存率が比較的高い土器が、カマド付近と北東部の 2 箇所出土した (第 9 図)。前者は、先述した土師器の甕 1 個体 (第 12 図 20) と須恵器の甕 2 個体 (第 12 図 23・24) である (巻頭図版 1・図版 7・8・10)。後者は、須恵器の甕 1 個体 (第 12 図 25) である。前者の須恵器甕 2 個体 (体部片) のうち、焼成不良の須恵器甕 (第 12 図 24) は、一部煤化している部分があることから、カマドの構築材に転用されていた可能性が考えられる。後者の須恵器甕は、口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部を下に向け、天地を逆にした状態で出土した。このことから、倒立状態で保管されていた状況が復元できる。なお、近接して、須恵器の杯蓋片 (第 12 図 21) を確認した。

この他、覆土からは弥生土器・土師器・須恵器の破片が出土しており、中には、年代の比定できる須恵器の杯身 (第 12 図 22) もあった。これらの遺物の様相から、S H 01 は 5 世紀後半 (古墳時代中期) の遺構と考える。

ピットは、17 基検出した (S 41～50・93～97・108・110)。平面形態は、大半が円形を呈しているが、僅かながら、隅円方形 (S 46) や不整形 (S 49) のものもみられた。法量は、直径 30～70cm を測るものが多い。

また、柱痕を有するもの 2 基 (S 45・50) を確認した。S H 01 の南東隅に近接する S 45 は、平面形態が楕円形を呈し、長軸 70cm を測る。柱痕も平面形態と同様に楕円形を呈し、長軸 25cm を測る。S 45 の柱痕からは、S H 01 カマド出土の土師器甕 (第 12 図 20) と、同



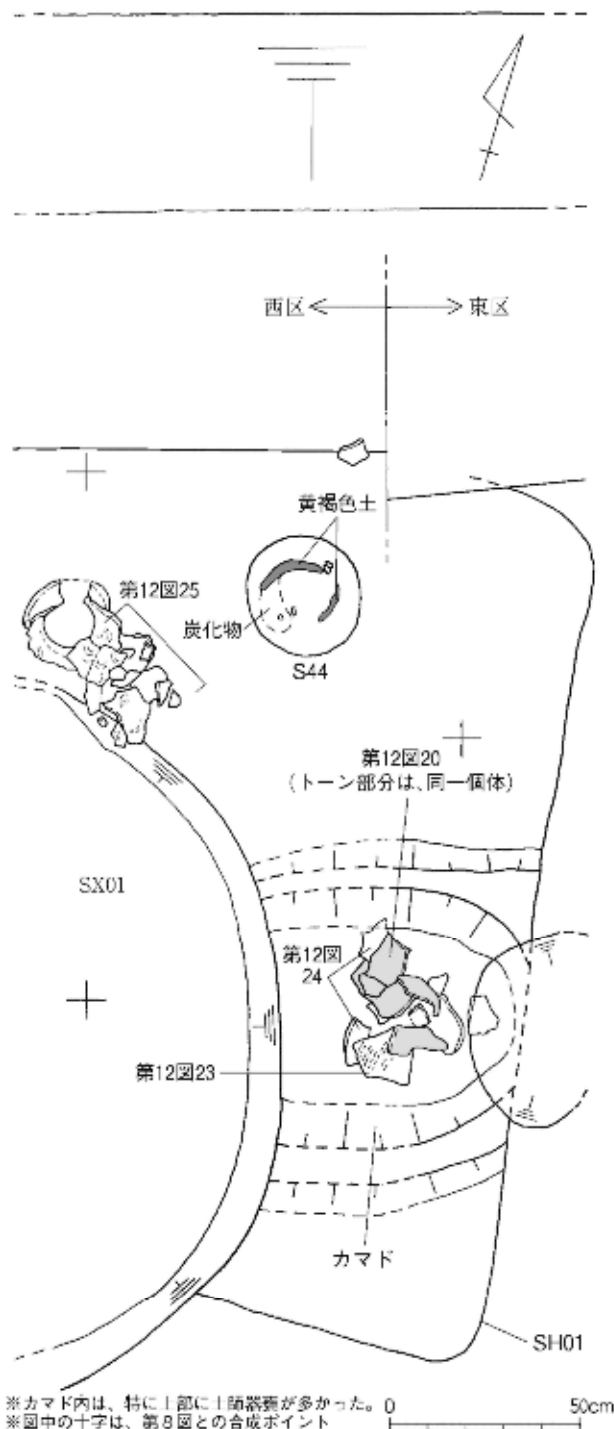
第8図 第2遺構面平面図 1/50

一個体とみられる甕体部片が出土した。S 50 の平面形態は円形を呈し、直径は 65cm を測る。柱痕も円形を呈し、直径 20cm を測る。S 50 の柱痕からは、暗文のみられる土師器や須恵器が確認されている。いずれも、小片のため年代の決定には至らなかった。この 2 基のピットは、法量が極めて類似している。南西-北東方向に並び、柱間距離が約 2.2 m を測り、掘立柱建物を構成していた可能性があるが、建物の復元はできなかった。

他のピットについては、S 93 からは弥生土器高杯、S 94 からは瓦器片、S 108 からは東播系須恵器椀が出土しているが、図化できない柱小片であった。また、弥生土器・土師器・須恵器を伴うピットもあったが、

いずれも小片のため、図化はしていない。なお、瓦器や東播系須恵器は、上層からの混入とみなした。

土坑は、東区で 2 基検出した (S 100・101)。S 100 は、サブトレンチによって、北西隅は失われているが、平面形態は隅門方形を呈している。法量は、長軸 2.2 m、短軸 1.1 m、深さ 11~14cm を測る。S 100 は、遺構内や東辺・西辺の屑に、円形のピットを検出しており (S 94~97)、直径 20cm を測るものが多い。これらのピットが、S 100 に伴うものかどうかは不明である。S 100 からは土師器・須恵器小片が出土している。S 101 は、東区東端で遺構の西辺のみを検出した。調査区やサブトレンチの影響を受けていることから、平面形態は不明であるが、調査区外に延びる。検出長は、



第9図 SH01 カマド土器出土状況 1/20

南北約2.1m、東西約0.9mで、深さは5～10cmであった。S101からは古式土師器鉢(第12図26)や、暗文のみられる律令期の土師器杯(第12図27)小片を確認した。この内、古式土師器の残存率が、かなり高いことから、遺構の年代は古墳時代前期と考える。

先述したように、SH01からは5世紀後半の遺物が出土している。また、S101から残存率の高い古墳時代前期の古式土師器が出土している。他の遺構からの出土遺物は、小片が多く年代は確定できなかった。なお、遺構面直上からは土師器のミニチュア土器(第

13図36)や5世紀の須恵器杯身(第13図38)と高杯(第13図39)が出土している。従って、第2遺構面は古墳時代前期から中期頃を主体とし、奈良時代を下限とする遺構面と判断した。

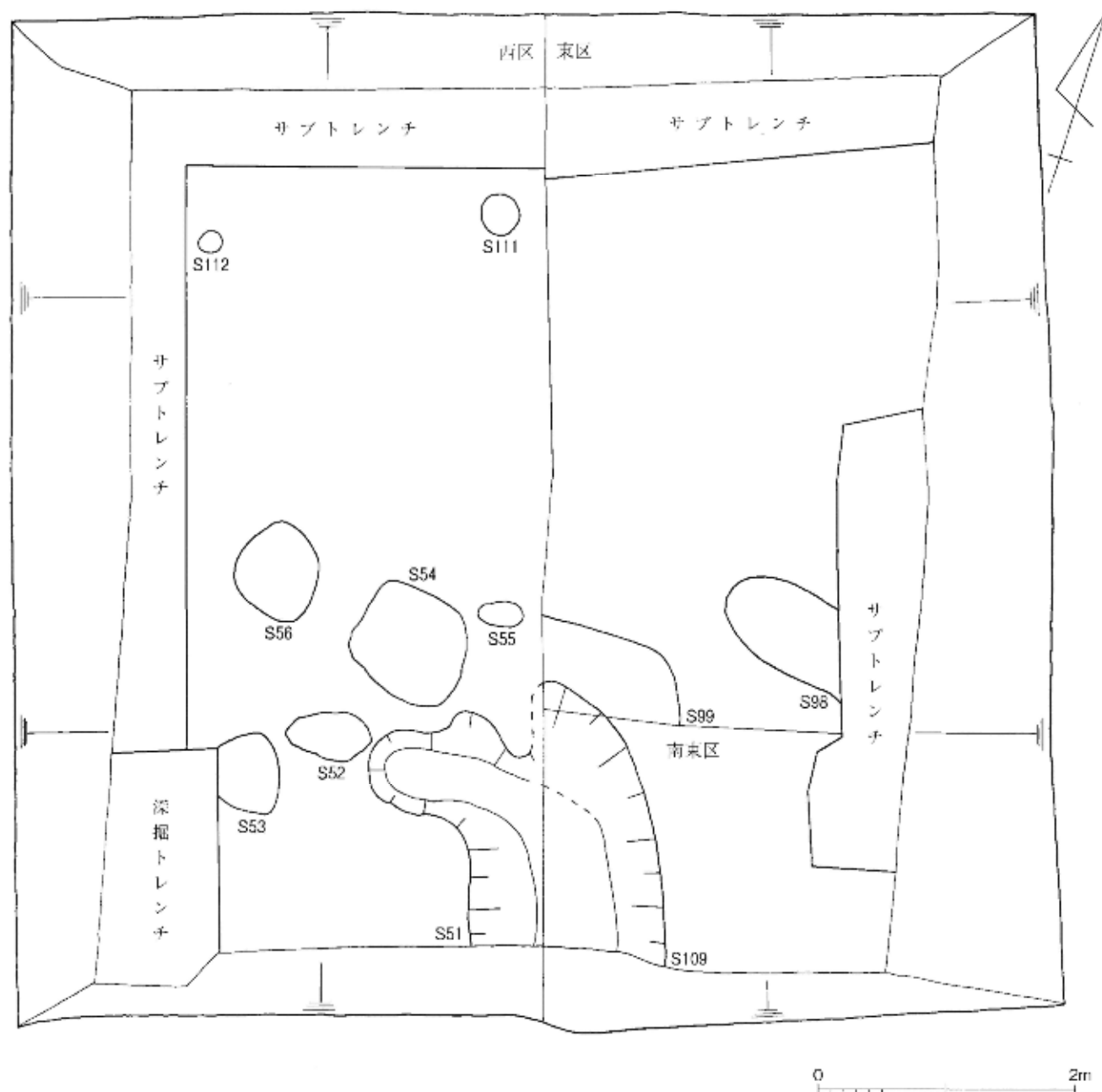
第3遺構面 第3遺構面では、ピット6基(S52・53・55・56・111・112)、土坑3基(S54・98・99)、溝2条(S51・109)を検出した(第10図、図版6・9)。この内、溝S51とS109は同一遺構と認識している。なお、S57～60は欠番とした。

ピットは、すべて西区で検出した。平面形態は、楕円形を呈するものが多いが、円形のものもみられた(S111・112)。楕円形を呈するピットの法量は、概ね長軸70～80cmを測るが、S55は長軸35cmの小さなものであった。円形のもの(S111・112)は、直径20～30cmを測る。S111は、埋土に炭化物を含むことから、第2遺構面SH01内で検出した、ピットS44の掘り残しの可能性がある。S112も同様にSH01内で検出したピットS43の掘り残しと考える。ピットの中には、弥生土器や土師器などを伴うものもあったが、いずれも小片であった。

土坑は、西区でS54、東区でS98・99を検出した。S54の平面形態は不整形で、長軸約1mを測る。S98の平面形態は楕円形を呈し、残存長0.95mを測る。但し、東部は調査区外に延びる。東区の南西端で検出したS99は、隅円方形を呈しており、西区・南東区への広がり確認できなかった。南西部はS109に切られているため、検出長は東西幅約1.1m、南北幅約0.7mである。土坑出土遺物は、弥生土器・土師器・須恵器の小片が確認されている。S98からは、残存率のかなり高い弥生土器の鉢(第12図28、図版10)も出土している。

西区のS51と東区のS109は、連続状態で検出したものではないが、同一の溝と認識している。S51・109は、北西から弧を描きながら南へ延びる。平面形態は不整形で、最大幅は1.6m、深さは13～37cmを測る。埋土の様相は、S51では暗灰褐色粘砂であったが、S109の南部壁面では、上から灰色砂+褐灰色砂、黄褐色砂、褐灰色砂の3層に分層した。この内、中位層の黄褐色砂の西側では、自然堆積層である第11層の流れ込みが顕著であった。このことから、人為的なものではなく、自然堆積層と考えた。また、S109の南部と北部では埋土の様相が異なり、南部はど有機物の含侵が目立ち、遺物も南部でのみ弥生土器・須恵器小片を確認した。一方、S51からは、比較的残存率の高い須恵器杯身(第12図29)や壺底部(第12図30)、甗の把手(第12図31)が出土した。なお、遺構の切り合い関係から、溝(S109)は土坑(S99)より新しいと考えられる。

以上のように、第3遺構面の出土遺物の多くは小片であったため、時期を判断するのは困難であったが、



第10図 第3遺構面平面図 1/50

S 98 からは残存率の高い弥生時代後期の弥生土器鉢（第12図28）が出土した。但し、S 54 や S 51・109 からや第3遺構面直上でも、須恵器を検出しているが、これらは上面遺構の掘り残しと判断した。このことから、第3遺構面は弥生時代後期を主体とする遺構面と想定する。

7. 遺物

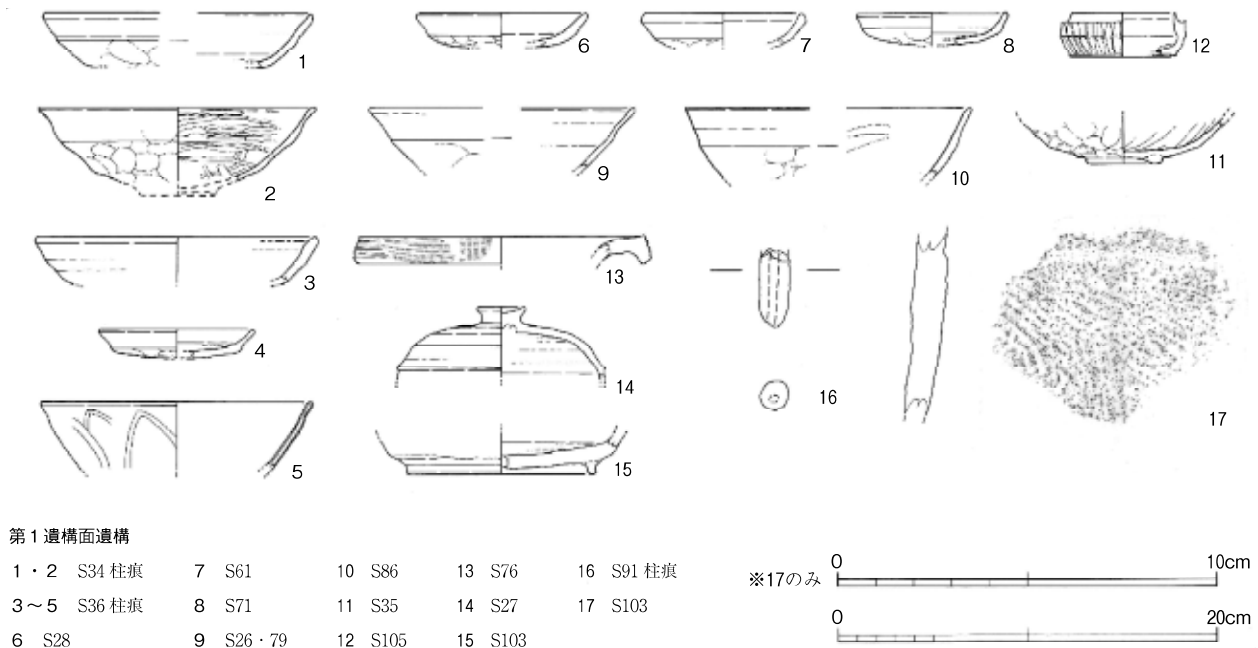
今回の調査では、縄文時代から中世の遺物が出土し、総量は27ℓ容量のコンテナ4箱分である。

遺物の種類は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・磁器（青磁・青白磁）・土製品（土錘）・支

脚石・玉石が出土している（第11～13図、巻頭図版2・図版11～13）。

第11図は、第1遺構面の遺構出土遺物である（図版11）。1・2がS 34柱痕、3～5がS 36柱痕、6がS 28、7がS 61、8がS 71、9がS 26（S 79と同一遺構と認識）、10がS 86、11がS 35、12がS 105、13がS 76、14がS 27、15がS 103、16がS 91柱痕、17がS 103から出土した。

1は、土師器で中皿に復元した。口縁端部には面取りがみられ、外面の口縁部下に1段ナデがめぐり、体部下半は指オサエが残る。灰白色を呈する。これらのことから、12世紀後半～13世紀初頭の所産とみられる〔伊野1995〕。2は瓦器碗で、やや閉き気味の体部



第11図 出土遺物実測図(1) 1/2・1/4

をもち、外面は口縁部下に1段ナデがみられ、体部は指オサエが顕著である。内面は、横方向の暗文が密に入る。佐藤編年Ⅲ－2段階〔佐藤 2022a〕に比定され、12世紀後半～13世紀初頭の所産とみられる。3は、土師器で中皿に復元した。口縁端部には面取りがみられ、外面の口縁部下に1段ナデをめぐらす。灰白色を呈す。1と同様、12世紀後半～13世紀初頭の所産とみられる〔伊野 1995〕。4も、12世紀後半～13世紀初頭の年代とみられる瓦器の小皿で、口縁部下のヨコナデが顕著である。外底面には、指オサエが強く残る。炭素の吸着が悪いため、灰白色を呈している。5は、片彫蓮弁文のみられる青磁碗である。断面は灰色を呈し、釉は濃緑色に発色する。大宰府編年Ⅱ－a類〔大宰府市教委 2000〕に比定されるので、13世紀前後のものと考えられる。6～8は、土師器の小皿である。6は、口縁端部に甘い面取りがみられ、外面の口縁部下に1段ナデを伴う。灰白色を呈する。7は、口縁端部の面取りが顕著で、外面の口縁部下に1段ナデを伴う。にぶい黄橙色を呈する。8は、口縁端部はやや甘い面取りで、外面の口縁部下に1段ナデを伴う。灰白色を呈する。6～8は、それぞれ差異があるが、口縁端部には面取りがみられ、口縁部下に1段ナデを伴うことから、12世紀後半～13世紀初頭の所産とみられる〔伊野 1995〕。9は土師器の碗に復元したが、炭素の吸着が不十分な瓦器の可能性も考えられる。10・11は瓦器碗である。2と比べると、暗文の退化が顕著である。なお、11は四角形の低い高台を有する。12は青白磁の合子で、外面全体に青白色の釉がかかる。内面には剥離痕があり、三個の小皿を伴う形状とわかる。

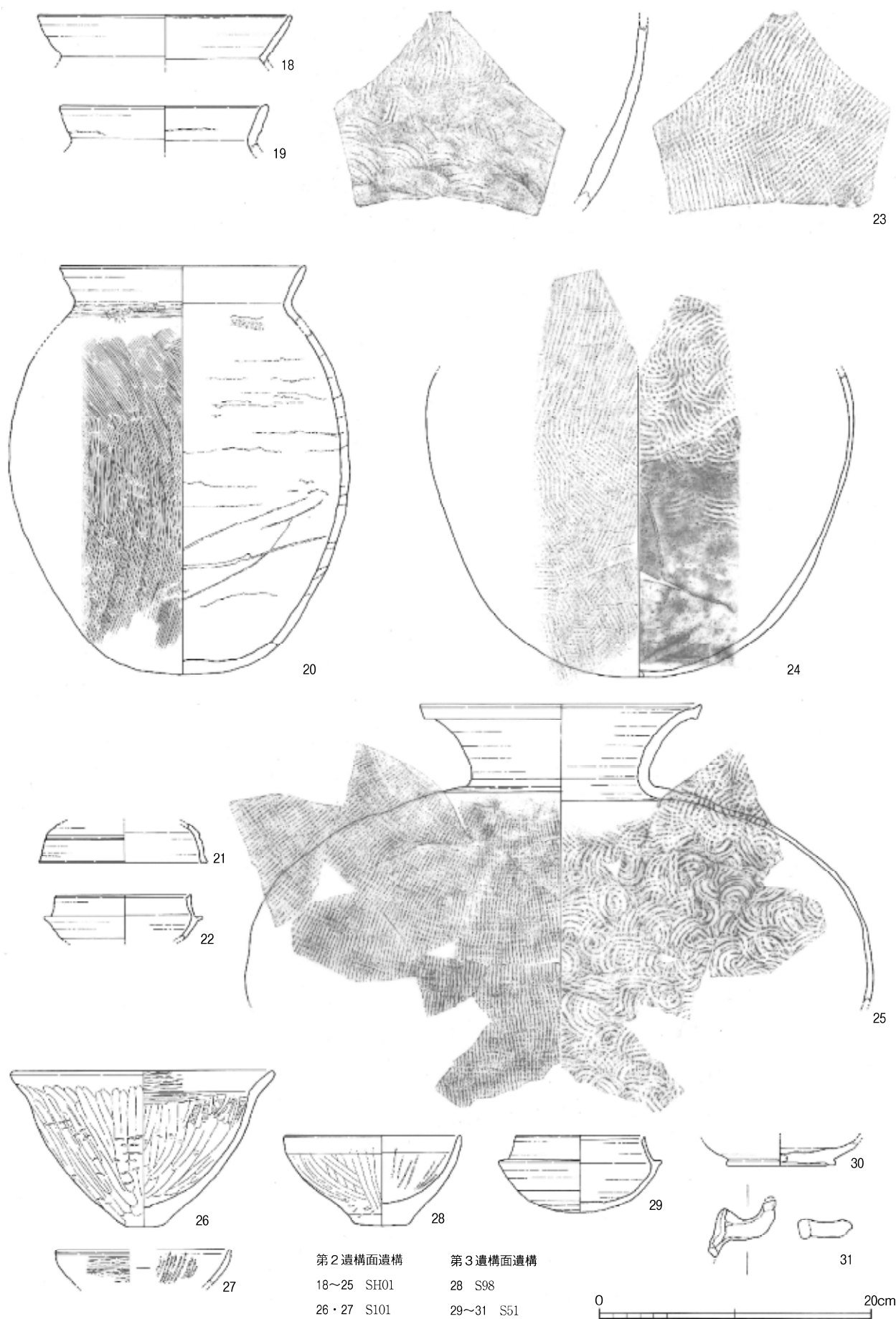
第1遺構面は、口縁端部の面取りと1段ナデを有す

る土師皿が多いことや瓦器の様相などから、中世（主に鎌倉時代前半）の遺構面と判断した。

この他、下位層に由来すると考えられる遺物もある（第11図13～17）。13は、弥生土器の広口壺である。拡張させた口縁部外面には、横方向4条と縦方向4条以上の凹線が施される。橙色を呈する。14は、中央がくぼんだつまみを有する須恵器の杯蓋もしくは高杯蓋である。一部、自然釉がかかり、断面はにぶい赤褐色と灰色のサンドイッチ状を呈す。天井部は高く丸みを持ち、ややにぶい稜を有する形状から、中村編年Ⅰ－5段階に比定され、5世紀後半と推測される〔中村 2001〕。15は須恵器の杯身で、底端部よりやや内側に低い高台を有する、杯Bである。16は、管状土錘である。縮尺を1/2にして図示した17は、縄文土器である。器形や型式、時期については、兵庫県教育委員会文化財課の大本朋弥氏にご教示いただいた。深鉢と考えられ、太い沈線の下位には、二枚貝条痕が施される。色調は、赤褐色を呈する。粗製の土器で、縄文後期の所産である。

第12図は、第2・3遺構面の遺構出土遺物である（図版12・13）。18～25が第2遺構面SH01、26・27が第2遺構面S101、28が第3遺構面S98、29～31が第3遺構面S51である。

18～20は、土師器の甕である。18は、口縁端部をやや垂直に摘み上げ、頸部はくの字状に屈曲することから、庄内式甕と判断した。浅黄色を呈する。19は、カマド下部から出土した。口縁端部内面は、面をつくるように整える。内外面ともに粘土紐接合痕が観察できる。内面はにぶい黄橙色、外面はにぶい黄橙～にぶい黄褐色を呈する。外面は、一部煤化している。20



第12図 出土遺物実測図(2) 1/4

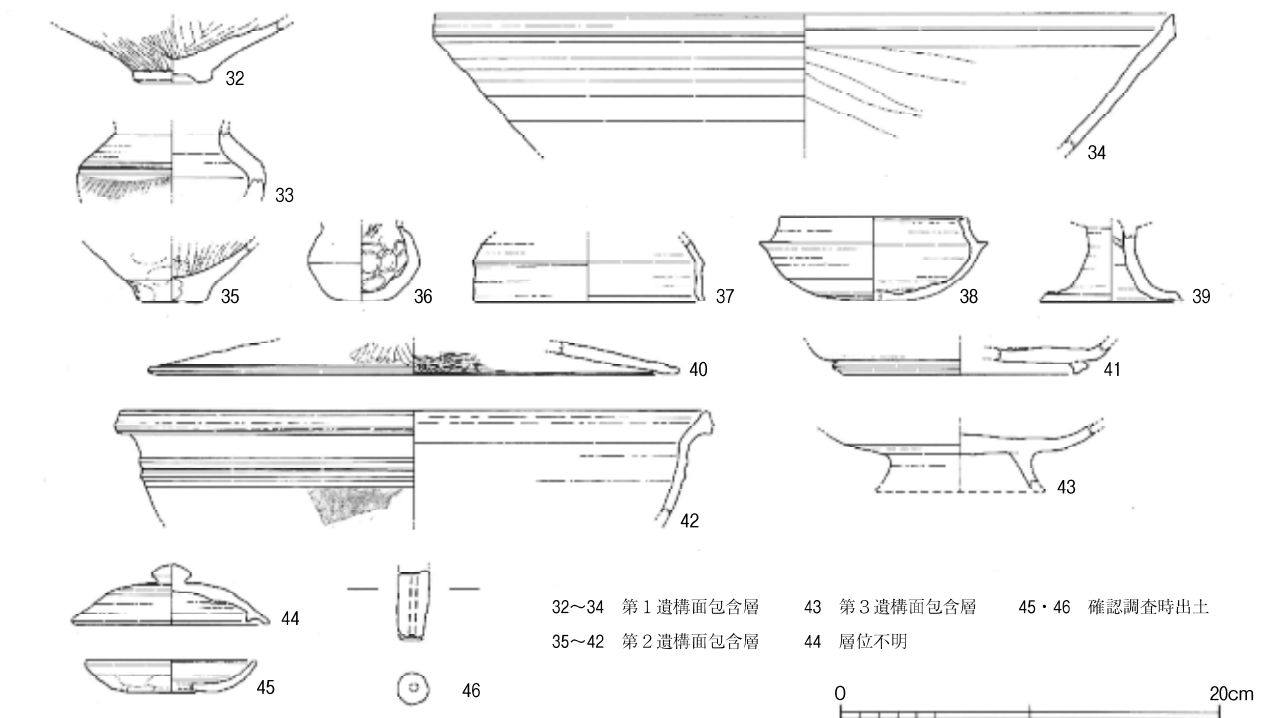
は大きな体部片がまとまって、カマド上部から出土した（巻頭図版1）。なお、S H 01 北東部で出土した口縁部を同一個体と認識したが、体部とは直接接合できなかったため、図上復元した。口縁端部は丸くおさめ、外面口縁部直下はややつよいヨコナデがめぐる。口縁部は内外面ともに、ナデによる横方向の条痕がみられる。頸部直下では、外面がタテハケのちヨコハケ、内面は横方向の櫛描きのちナデで整える。体部は、外面に13条／1.7cmを単位とする細かいタテハケ、内面や断面には粘土紐接合痕が明瞭に確認でき、内面に板ナデのような工具痕による条痕も看取できる（図版12）。橙色を呈する。

21は、須恵器の杯もしくは高杯の蓋である。稜は形骸化しており、沈線で表現される。口縁端部はわずかに外方に屈曲し、端部は凹面をなす。22は、須恵器の杯身である。断面は赤褐色と灰色のサンドイッチ状を呈する。立ち上りは内傾し、端部は凹面をなす。受部は短い。21・22は、中村編年Ⅰ－5段階に比定される。23～25は、須恵器の甕である（巻頭図版2）。23は20同様、カマド上部から出土している。外面はタタキのちカキメ、内面は同心円当て具痕をナデ消している。被熱痕跡のためか上部と下部で色調が異なり、上部は灰黄褐色、下部はにぶい橙色を呈する。24は、最大腹径31.4cm、残存高22.6cmを測る。多くがカマドの上部と下部からの出土だが、S H 01 北東部周辺出土のものとも接合した。外面は体部上部がタテ方向の平行タタキのち不規則な横方向のカキメ、体部下から底部までを格子目タタキで成形する。上部と下部では、タタキの様相に差異があるため、異なる原体

を用いていると考える。内面は、体部に当て具痕が残るが、下部から底部は当て具痕をナデ消している。一部、被熱痕跡が認められることから、壁体等のカマド構築材に用いられていた可能性もある。25は、口径20.6cm、残存高22.1cmを測る。S H 01 北東部で、まとまって検出した。口縁端部は上下に拡張し、口頸部は短く外反する。体部外面は縦方向の平行タタキ、内面は同心円当て具痕がみられる。24・25ともに、体部の器壁は3～4mmを測る大変薄手のものである。以上の土器の様相から、S H 01 は古墳時代中期の遺構と判断した。

26は、残存率の高い古式土師器の鉢である。口縁端部は、丸くおさめる。外面は口縁直下までタタキのち縦方向のヘラミガキ、内面は口縁部から頸部直下までは横方向の細かいヘラミガキ、それより下位は横方向のハケメのち縦方向のヘラミガキで整形される。外面は浅黄橙～にぶい黄橙色、内面は浅黄橙色を呈する。一部、黒斑がみられる。27は、土師器の杯である。にぶい橙色を呈し、外面は丁寧な横方向のヘラミガキ、内面は放射状暗文が観察できるので、律令期のものと考えられる。S H 01 やS 101 の遺物の様相から、第2遺構面は古墳時代前期から中期頃を主体とする遺構面と判断した。

28は、弥生土器の鉢である。口縁部は欠損するが、ほぼ完形の状態検出された。碗型を呈し、外面はタタキのち縦方向のハケメもしくはミガキを施し、内面は縦方向の細いミガキが看取される。図示していないが、底部にはヘラ状工具による木葉痕状の沈線が残る。外面は橙色、内面はにぶい黄橙色を呈する。V様式の



第13図 出土遺物実測図(3) 1/4

鉢と考えられる。29・30は、須恵器である。29は口縁部に欠損があるが、残存率の高い杯身である。口縁部の立ち上りは内傾し、口縁端部も内傾し凹面を呈す。受部は短く、底部は丸みをもつ。中村編年Ⅰ－5段階に比定される。30は、壺の底部と判断した。外に向かって張り出す低い高台を有する。31は、土師器の甑の把手である。把手部分には、粘土紐接合痕が明瞭に残る。以上のことから、掘り残しと考える29～31のような土器を伴うが、第3遺構面の年代は28の出土状況から弥生時代後期と判断した。

第13図は、遺物包含層や確認調査時等に出土した遺物である(図版11・13)。32～34は第1遺構面包含層、35～42は第2遺構面包含層、43は第3遺構面包含層、44は層位不明、45・46は確認調査時出土遺物である。

32は、弥生土器の鉢底部である。外面はにぶい橙色で縦方向の細かいヘラミガキ、内面は灰黄褐色で板ナデのような工具痕が残る。底部は上げ底状である。33は、須恵器の甕体部である。肩部が張り、体部は2条の沈線の下位に櫛描き列点文が施される。34は、東播系須恵器の捏鉢である。口径39.0cmを測り、口縁部の拡張がさほど目立たないことから、13世紀前半のものと考えられる〔佐藤2022b〕。35は、弥生土器の鉢である。外面は橙色で、底部の一部にタタキ痕が残るが、全体的に指オサエで整える。内面は黒褐～浅黄橙色でクモの巣状ハケメのちヘラミガキで整える。V様式の鉢である。36は、土師器のミニチュア土器である。口縁部は欠損するが、体部～底部は完存する。底部外面は平底に整える。外面はナデで仕上げ、内面は工具等による圧痕が強く残る。にぶい橙色を呈する。37は、須恵器の杯蓋である。口縁端部は内傾し、凹面をなす。突出した稜を有する。38は、須恵器の杯身である。残存率が高く、立ち上りは内傾し、口縁端部も内傾し凹面をなす。37・38は、中村編年Ⅰ－5段階に比定される。39は、脚部完存の須恵器の短脚高杯である。古墳時代中期のものと考えられる。40は、土師器の大形高杯である。底径28.0cmに復元した。外面は、裾部をハケメのち縦方向のヘラミガキで整え、端部直上には凹線が巡る。内面は裾部から底部まで、不定方向の細かいハケメがみられる。にぶい黄橙色を呈する。古墳時代中期頃のものとする。41は、須恵器の杯身である。ハの字状に開く高台をもつ、奈良時代の杯Bと考える。42は、須恵器の高杯形器台である。口径31.0cmに復元した。杯身は内弯気味に立ち上り、端部は外側に大きく屈曲して上下に拡張する端面を有する。外面には、断面三角形の突線が2条めぐり、その下位には細かい櫛描き波状文が2単位以上施文される。43は底端部が欠損しているが、残存率の高い須恵器の台付皿である。投松1号窯台付皿A bタイプ〔兵庫県教委2001〕と類似しており、平安時代の所産であろう。44も残存率が高い。宝珠つまみが

つき、返りを有する、7世紀の須恵器杯蓋である。45は、土師器の小皿である。端部は丸くおさめ、外面の口縁部下に1段ナデをめぐらせ、下位は指オサエで成形する。灰白色を呈する。46は、土製品の管状土鍾である。

他に、図化していないが、SH01カマド床面から少し浮いた状態で出土したカマドの支脚石(巻頭図版2の47)と南東区出土の玉石(図版13の48)の写真を掲載している。47は、截頭椎体の花崗岩である。法量は底部一辺約7cm、上部一辺約5cm、高さ約12cmを測る。礫は全体的に赤化しており、特に下部の被熱痕跡が著しかった。48は不整形で、長軸長9.6cm、最大幅5.1cm、厚さ2.9cm、重量250gを測る。灰白色を呈するが、下部にはにぶい赤褐色(7.5R5/3)の部分が散見される。握りやすい形状と朱色部分が下部に偏在していることから、朱を擦った磨石の可能性も考えられる。

8. まとめ

今回の調査地では、合計3面の遺構面を検出した。第1遺構面は中世(主に鎌倉時代前半)、第2遺構面は古墳時代前期から中期頃を主体とし、奈良時代を下限、第3遺構面は弥生時代後期を主体とする遺構面である。

主な遺構としては、第1遺構面では柱痕を有する9基のピットを検出した。中には、掘立柱建物を構成するピットもあると推測されるが、建物は復元できなかった。第2遺構面では、古墳時代中期のカマドを伴う堅穴住居跡を1棟検出した(SH01)。カマドやその周辺からは、残存率の高い土師器甕や須恵器甕がみつかった(第12図20・24・25、巻頭図版2)。また、カマドでは被熱痕跡の顕著な支脚石も確認した(巻頭図版2の47)。第3遺構面では、S98からほぼ完存の弥生土器鉢が出土したことから、遺構面の年代を弥生時代後期と判断した(第12図28、図版13)。また、北西から弧を描きながら南へ延びる溝(S51・109)を検出した。但し、溝は堆積状況から、人為的なものではないと判断した。

なお、南接する寺田遺跡第127地点で検出されている遺構面と、本調査地点の各遺構面とは年代的に合致するが、親和性のある遺構は検出されなかった。

引用・参考文献目録

伊野近富 1995 「土師器Ⅲ」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 編 真陽社
古代学協會 1985 『芦屋市寺田遺跡発掘調査報告書』南 博史ほか 編
佐藤亜聖 2022a 「畿内産瓦器Ⅲ」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会 編 真陽社
佐藤亜聖 2022b 「東播系須恵器」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会 編 真陽社

太宰府市教育委員会 2000 『大宰府条坊跡X V—陶磁器分類編—』〈太宰府市の文化財第 49 集〉山本信夫 編
中村 浩 2001 『和泉陶器窯 出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版
兵庫県教育委員会 2001 『兵庫県加古川市所在 志方窯跡群Ⅱ—投松支群— 山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告X X XⅣ—』〈兵庫県文化財調査報告第 217 冊〉

芦屋市文化財調査報告目録

第 1 集 『芦屋市史追録』第 1 号 有坂隆道 編 村川行弘 著 1959 年 3 月 28 日刊行
第 2 集 『大阪城と芦屋』村川行弘ほか 1962 年 3 月 31 日刊行
第 3 集 『会下山遺跡』村川行弘・石野博信ほか 1964 年 3 月 31 日刊行
第 4 集 『朝日ヶ丘縄文遺跡 八十塚古墳群』村川行弘・橋爪康至・藤岡 弘・安田博幸 1966 年 4 月 15 日刊行
第 5 集 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地台帳 八十塚E号墳発掘調査報告』村川行弘・佐々木幸雄・藤岡 弘 1967 年 3 月 7 日刊行
第 6 集 『郷土資料室文化財所蔵品目録 石造遺品分布調査報告』藤岡 弘・芦の芽グループ 1968 年 3 月 31 日刊行
第 7 集 『芦屋廃寺址』村川行弘・藤岡 弘 1970 年 3 月 31 日刊行
第 8 集 『朝日ヶ丘縄文遺跡 会下山弥生遺跡』藤井祐介・森岡秀人 1974 年 3 月 31 日刊行
第 9 集 「第 2 章 民家・民具の調査」「第 3 章 春日地区街並み調査」『芦屋の生活文化史—民俗・史跡をたずねて—』田辺真人ほか 1979 年 3 月 31 日刊行
第 10 集 『三条岡山遺跡』森岡秀人 編 1979 年 8 月 31 日刊行
第 11 集 『芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査』森岡秀人・古川久雄 編 1979 年 11 月 30 日刊行
第 12 集 『芦屋市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表（第 1 分冊）』森岡秀人 編 1980 年 3 月 31 日刊行
第 13 集 『兵庫県芦屋市六麓荘町 174 番地所在 八十塚古墳群発掘調査概報—岩ヶ平支群F小支群西地区の緊急調査成果概要—』森岡秀人 編 1983 年 3 月 31 日刊行
第 14 集 『埋蔵文化財調査メモリアル'80～'85』森岡秀人 編 1986 年 3 月 31 日刊行
第 15 集 『昭和 62 年度国庫補助事業 芦屋廃寺遺跡G・I 地点発掘調査概要報告書』森岡秀人・和田秀寿・関野 豊 編 1988 年 3 月 31 日刊行
第 16 集 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き』森岡秀人 編 1988 年 3 月 31 日刊行
第 17 集 『昭和 63 年度国庫補助事業 芦屋廃寺遺跡K 地点・寺田遺跡第 16 次地点発掘調査概要報告書』森岡秀人・和田秀寿・後神 泉 編 1989 年 3 月 31 日刊行
第 18 集 『三条九ノ坪遺跡—第 2 地点発掘調査簡報—』森岡秀人・和田秀寿・後神 泉 編 1990 年 3 月 31 日刊行
第 19 集 『平成元年度国庫補助事業 寺田遺跡第 20 次地点金津山古墳後円部範囲・構造確認調査 三条九ノ坪遺跡第 4 地点 発掘調査概要報告書』森岡秀人・和田秀寿・後神 泉 編 1990 年 3 月 31 日刊行

第 20 集 『芦屋市八十塚古墳群岩ヶ平支群第 10 号墳の調査—古墳損壊に伴う確認調査の結果—』古川久雄 編 1990 年 12 月 28 日刊行
第 21 集 『平成 2 年度国庫補助事業 芦屋廃寺遺跡ほか発掘調査概要報告書 寺田遺跡第 23 次地点 寺田遺跡第 24 次地点 寺田遺跡第 25 次地点 寺田遺跡第 27 次地点 芦屋廃寺遺跡M 地点 芦屋廃寺遺跡N 地点』森岡秀人・松村朋世・後神 泉 編 1991 年 3 月 31 日刊行
第 22 集 『平成 3 年度国庫補助事業 芦屋廃寺遺跡ほか発掘調査概要報告書 月若遺跡第 12 次地点 月若遺跡第 14 次地点 八十塚古墳群岩ヶ平支群第 50 号墳』森岡秀人・白谷朋世 編 1992 年 3 月 31 日刊行
第 23 集 『平成 4 年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 打出小槌遺跡第 7 次地点 打出小槌遺跡第 2 次地点 打出小槌遺跡第 3 次地点』森岡秀人・白谷朋世 編 1993 年 3 月 31 日刊行
第 24 集 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き』森岡秀人・和田秀寿・白谷朋世 編 1993 年 3 月 31 日刊行
第 25 集 『平成 5 年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 六麓荘町 94 番地（八十塚古墳群・徳川氏大坂城岩ヶ平採石場）』森岡秀人・白谷朋世 編 1994 年 3 月 31 日刊行
第 26 集 『平成 6 年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 月若遺跡（第 19 地点）』森岡秀人 編 1995 年 3 月 31 日刊行
第 27 集 『平成 7 年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認（試掘）調査—概要報告書 寺田遺跡（第 40・41・47・52・55・57 地点）芦屋廃寺遺跡（W 地点・第 29・38 地点）月若遺跡（第 20・25・28・30・33 地点）打出岸造り遺跡（第 1 地点）打出小槌遺跡（第 17 地点）金津山古墳（第 9 地点）久保遺跡（第 15 地点）山芦屋遺跡（S 8 地点）』森岡秀人・木南アツ子 編 1996 年 3 月 31 日刊行
第 28 集 『阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（平成 7 年度分）概要報告書 芦屋廃寺遺跡（W 地点）芦屋廃寺遺跡（第 29 地点）月若遺跡（第 20 地点）月若遺跡（第 28 地点）打出岸造り遺跡（第 9 地点）久保遺跡（第 15 地点）』森岡秀人 編 1997 年 3 月 31 日刊行
第 29 集 『月若遺跡（第 18 地点）発掘調査簡報—芦屋川扇状地右岸地域における古墳時代集落の展開—』森岡秀人 編 1997 年 3 月 31 日刊行
第 30 集 『若宮遺跡（第 1・2 地点）発掘調査報告書—震災復興住環境整備事業（芦屋市若宮町住宅 1 号館建設）に

- 伴う埋蔵文化財事前調査の成果―』 森岡秀人・竹村忠洋 編 1999年8月31日刊行
- 第31集 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅰ―芦屋墓園拡張工事に伴う奥山刻印群K地区内の事前発掘調査―』 森岡秀人 編 1998年3月31日刊行
- 第32集 『寺田遺跡第95地点発掘調査概要報告書 阪神・淡路大震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果』 重藤輝行・竹村忠洋 編 1999年9月30日刊行
- 第33集 『八十塚古墳群の研究』＜関西大学文学部考古学研究第7冊＞ 網干善教・米田文孝・竹村忠洋・太田宏明・海邊博史 編 関西大学文学部考古学研究室 2002年3月31日刊行
- 第34集 『津知遺跡第17地点発掘調査概要報告書―芦屋西部第二地区土地区画整理事業（津知第2公園）に伴う震災復興調査―』 竹村忠洋 編 1999年3月31日刊行
- 第35集 『芦屋廃寺遺跡（第53地点）・寺田遺跡（第104地点）震災復興埋蔵文化財確認調査概要報告書 津知川排水区雨水管敷設工事（東川用水路推定地）に伴う確認調査』 森岡秀人・竹村忠洋・古川久雄 編 1999年3月31日刊行
- 第36集 『三条岡山遺跡―第11地点発掘調査概要―』 渡辺昇 編 1998年12月15日刊行
- 第37集 『津知遺跡（第19地点）従前居住者用住宅（（仮称）津知町住宅）新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―震災復興事業―』 篠宮 正 編 2000年3月31日刊行
- 第38集 『若宮遺跡（第3・4・10・11・16・17・25・31・32・33・34地点）発掘調査概要報告書―若宮地区住環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果―』 竹村忠洋 編 2002年3月31日刊行
- 第39集 『寺田遺跡（第117～124地点）発掘調査概要報告書 都市計画道路川西線建設に伴う発掘調査―震災復興調査―』 山田清朝 編 2001年3月31日刊行
- 第40集 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き』 森岡秀人・竹村忠洋 編 2001年3月31日刊行
- 第41集 『六条遺跡発掘調査報告書―芦屋西部第一地区震災復興土地区画整理事業・清水公園建設事業に伴う六条遺跡（第17・18地点）の事前調査記録―』 森岡秀人・坂田典彦 編 2002年2月28日刊行
- 第42集 『平成13年度国庫補助事業 徳川大坂城東六甲採石場Ⅱ 岩ヶ平刻印群（第11次）発掘調査報告書』 古川久雄 編 2002年3月31日刊行
- 第43集 『兵庫県芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書 第127・130・132・133地点―都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査―』 前田佳久・平田朋子・中居さやか 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2002年3月31日刊行
- 第44集 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅲ 岩ヶ平刻印群（第12次）発掘調査報告書―芦屋市六麓荘浄水場高区配水池（水道施設）築造工事に伴う唐津藩採石場跡の発掘調査―』 古川久雄 編 2003年2月28日刊行
- 第45集 『兵庫県芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書 第132・133・137・139・141・142地点―都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅱ―』 前田佳久・千種 浩・佐伯二郎・平田朋子・中居さやか 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2003年3月31日刊行
- 第46集 『津知遺跡第142地点ほか発掘調査報告書―芦屋西部第二地区震災復興土地区画整理事業に伴う震災復興調査の成果―』 竹村忠洋・山内芳子 編 2003年3月31日刊行

- 第47集 『平成12・13年度国庫補助事業 寺田遺跡（第128地点）発掘調査報告書―集落東端部の様相と知見―』 森岡秀人・坂田典彦 編 2003年3月31日刊行
- 第48集 『摂津・藤ヶ谷古墓―藤ヶ谷遺跡第5地点・古代火葬墓の調査―』 森岡秀人 編 2003年3月31日刊行
- 第49集 『津知遺跡の発掘調査―第157地点における条里地割内の様相―簡報』 森岡秀人・坂田典彦 編 2005年3月31日刊行
- 第50集 『津知遺跡（第181地点）発掘調査報告書―共同住宅建設事業に伴う遺跡西限部の様相把握―』 森岡秀人・坂田典彦 編 2004年5月31日刊行
- 第51集 『月若遺跡（第71地点）発掘調査報告書』 竹村忠洋・白谷朋世 編 2004年2月29日刊行
- 第52集 『前田公園建設事業に伴う前田遺跡（第20地点）発掘調査概要報告書―弥生前期水田跡の構造と水利動態―』 森岡秀人 編 2004年3月31日刊行
- 第53集 『三条岡山遺跡 第3地点発掘調査報告書（1981発掘記録）―中枢地区北部隣接地の様相と出土遺物―』 森岡秀人 編 芦屋市教育委員会・三条岡山遺跡発掘調査団 2005年3月31日刊行
- 第54集 『山芦屋遺跡S3地点発掘調査報告書―1982・新出の終末期古墳・三条5号墳とその性格―』 森岡秀人 編 山芦屋遺跡発掘調査団 2005年3月31日刊行
- 第55集 『津知遺跡（第198・222地点）発掘調査報告書―芦屋西部第二地区震災復興土地区画整理事業に伴う震災復興調査の成果―』 竹村忠洋 編 2004年3月31日刊行
- 第56集 『元塚発掘調査報告書』 竹村忠洋・白谷朋世 編 2005年3月31日刊行
- 第57集 『兵庫県芦屋市 月若遺跡発掘調査報告書 第68・69・70地点―都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅲ―』 前田佳久・石島三和・中村大介ほか 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2004年3月31日刊行
- 第58集 『若宮遺跡（第42地点）発掘調査報告書 須恵器集中遺存地点の調査と成果』 森岡秀人・坂田典彦 編 2005年3月31日刊行
- 第59集 『兵庫県芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書 第150～153・157～160・166～168地点―都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅳ―』 川上厚志・阿部 功・中村大介 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2005年3月31日刊行
- 第60集 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅳ 岩ヶ平石切丁場跡―芦屋市岩園町宅地造成工事に伴う埋蔵文化財事前調査の記録と成果―』 森岡秀人・坂田典彦 編 2005年9月30日刊行
- 第61集 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅴ 岩ヶ平刻印群（第85地点）発掘調査報告書―長州藩毛利家石切丁場跡における発掘調査の成果―』 竹村忠洋・白谷朋世 編 2006年3月31日刊行
- 第62集 『兵庫県芦屋市 業平遺跡第61地点 月若遺跡第79・81地点 寺田遺跡第178・181地点 発掘調査報告書―都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅴ―』 安田 滋 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2006年3月31日刊行
- 第63集 『八十塚古墳群（第106地点）発掘調査報告書―八十塚古墳群岩ヶ平支群第10号墳と徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群の調査―』 白谷朋世 編 2006年12月25日刊行
- 第64集 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅵ 岩ヶ平刻印群発掘調

- 査報告書 第32・33・45・67・70・79・81・91地点 ―平成9・11・14・15・16年度国庫補助事業― 森岡秀人・竹村忠洋 編 2006年3月31日刊行
- 第65集 『平成12年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書―震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果― 城山南麓遺跡（C・D地点） 西山町遺跡（第7地点） 芦屋廃寺遺跡（第71地点） 六条遺跡（第13地点） 津知遺跡（第24・31地点） 打出岸造り遺跡（第32地点） 四ツ塚（第7地点） うの塚（第1地点）』 森岡秀人・竹村忠洋 編 2007年3月31日刊行
- 第66集 『打出小槌遺跡（第41地点）発掘調査報告書』 竹村忠洋・白谷朋世 編 2007年3月31日刊行
- 第67集 『八十塚古墳群・岩ヶ平石切場（徳川大坂城東六甲採石場Ⅶ）―岩ヶ平第45・46・58号墳と第108地点の発掘調査成果―』 森岡秀人・坂田典彦 編 2007年3月31日刊行
- 第68集 『兵庫県芦屋市 月若遺跡発掘調査報告書 第83地点―都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅵ―』 斎木 巖 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2007年3月31日刊行
- 第69集 『兵庫県芦屋市 月若遺跡発掘調査報告書 第89地点―都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅶ―』 斎木 巖 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2008年3月31日刊行
- 第70集 『前田遺跡（第26地点）発掘調査報告書―弥生時代前期水田跡の北限域の状況―』 森岡秀人・坂田典彦 編 2007年6月30日刊行
- 第71集 『芦屋川水車場跡発掘調査報告書―城山古墳群第20号墳と芦屋川水車場跡の発掘調査成果―』 竹村忠洋・白谷朋世 編 2007年9月30日刊行
- 第72集 『平成13年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書―市内遺跡及び震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査の結果― 芦屋廃寺遺跡（第74・75・77・79地点） 寺田遺跡（第143地点） 六条遺跡（第43地点） 津知遺跡（第43・69地点） 大原遺跡（第45地点） 打出岸造り遺跡（第35地点）』 森岡秀人・竹村忠洋 編 2008年3月31日刊行
- 第73集 『平成18年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書―徳川大坂城東六甲採石場Ⅷ― 三条会下遺跡（第2地点） 岩ヶ平刻印群（第122地点） 岩ヶ平刻印群（第124地点） 岩ヶ平刻印群（第126地点）』 森岡秀人・竹村忠洋 編 2008年3月31日刊行
- 第74集 『芦屋市山手幹線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要―総集編―』 山本雅和 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2008年3月31日刊行
- 第75集 『金津山古墳発掘調査報告書―第17地点で検出した外周濠の発掘調査成果―』 白谷朋世 編 2008年12月24日刊行
- 第76集 『兵庫県芦屋市 月若遺跡発掘調査報告書 第96地点―都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅷ―』 竹村忠洋・守田めぐみ 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2009年3月31日刊行
- 第77集 『旭塚古墳 城山古墳群発掘調査報告書―第1・2次確認調査結果の概要と多角形終末期横穴式石室墳の保存調査―』 森岡秀人・坂田典彦 編 2009年3月31日刊行
- 第78集 『平成14年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書―震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査とその

- 成果― 城山南麓遺跡（E・F・G地点） 冠遺跡（第23地点） 芦屋廃寺遺跡（第81・88地点） 月若遺跡（第74地点） 寺田遺跡（第144地点） 津知遺跡（第123・187地点） 打出岸造り遺跡（第38・39地点） 久保遺跡（第47・48地点） 打出小槌遺跡（第36・37地点）』 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦 編 2009年3月31日刊行
- 第79集 『平成19年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査報告書 寺田遺跡（第191地点） 山芦屋遺跡（S14地点）』 森岡秀人・竹村忠洋・守田めぐみ 編 2009年3月31日刊行
- 第80集 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き』 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦・白谷朋世 編 2009年4月1日刊行
- 第81集 『会下山遺跡出土遺物再整理基礎データ使用の手引き―』 森岡秀人・竹村忠洋 編 2009年3月31日刊行
- 第82集 『三条岡山遺跡発掘調査報告書（第19地点）―片鱗をみせる中世居館と三条岡山古墳群―』 白谷朋世 編 2009年9月30日刊行
- 第83集 『平成15年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 芦屋廃寺遺跡（第89地点） 寺田遺跡（第171地点） 清水遺跡（第22地点） 金津山古墳（第12地点）』 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦・白谷朋世 編 2010年3月31日刊行
- 第84集 『平成20年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 城山南麓遺跡（K地点） 芦屋廃寺遺跡（第108地点） 月若遺跡（第102地点） 寺田遺跡（第197地点） 岩ヶ平刻印群（第169地点）―徳川大坂城東六甲採石場X―』 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦・白谷朋世 編 2010年3月31日刊行
- 第85集 『兵庫県芦屋市 会下山遺跡確認調査報告書―遺跡分布範囲の確認を目的とした第8～10次発掘調査の成果―』 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦 編 2010年8月31日刊行
- 第86集 『兵庫県芦屋市 月若遺跡発掘調査報告書 第98・100地点―都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅸ―』 竹村忠洋 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2010年10月31日刊行
- 第87集 『兵庫県芦屋市 芦屋廃寺遺跡（第115地点）発掘調査概要報告書』 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦・白谷朋世 編 2010年7月31日刊行
- 第88集 『平成21年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 岩ヶ平刻印群（第176地点）―徳川大坂城東六甲採石場XⅢ― 芦屋廃寺遺跡（第113地点） 打出岸造り遺跡（第56地点）』 森岡秀人・坂田典彦・白谷朋世 編 2011年3月31日刊行
- 第89集 『平成22年度 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 寺田遺跡（第209地点） 若宮遺跡（第50・51・52・57地点）』 森岡秀人・坂田典彦・白谷朋世 編 2012年3月31日刊行
- 第90集 『平成16・17年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 打出岸造り遺跡（第47地点）』 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦 編 2012年3月31日刊行
- 第91集 『平成22年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 三条九ノ坪遺跡（第40地点） 打出小槌遺跡（第45地点）』 森岡秀人・白谷朋世 編 2012年3月31日刊行
- 第92集 『徳川大坂城東六甲採石場XⅣ 奥山刻印群第112地点調査報告書―市立芦屋病院内毛利家石切丁場の勝示

- 刻印石―』 竹村忠洋・坂田典彦・西岡崇代 編 2012年3月31日刊行
- 第93集 『兵庫県芦屋市 月若遺跡第96地点出土 小銅鐸調査・分析報告書』 森岡秀人・竹村忠洋 編 2012年3月31日刊行
- 第94集 『寺田遺跡第213地点発掘調査報告書』 坂田典彦・西岡崇代 編 2013年3月31日刊行
- 第95集 『平成8年度国庫補助事業（1） 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書―阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査― 三条九ノ坪遺跡（第15地点）月若遺跡（第35・37地点） 月若遺跡（第36地点） 業平遺跡（第26地点） 業平遺跡（第29地点） 業平遺跡（第31地点） 大原遺跡（第21地点）』 白谷朋世 編 2013年3月31日刊行
- 第96集 『平成23年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 寺田遺跡（第212地点）』 白谷朋世 編 2013年3月31日刊行
- 第97集 『平成8年度国庫補助事業（2） 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書―阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査― 芦屋廃寺遺跡（Z地点・第45地点・第49地点） 寺田遺跡（第77地点・第89地点・第90地点） 打出小槌遺跡（第22地点）』 白谷朋世 編 2014年3月31日刊行
- 第98集 『芦屋廃寺遺跡（第122地点）発掘調査概要報告書』 竹村忠洋・森岡秀人・坂田典彦 編 2014年3月31日刊行
- 第99集 『八十塚古墳群第145地点発掘調査報告書―八十塚古墳群岩ヶ平支群第60・61号墳の調査―』 白谷朋世 編 2014年3月31日刊行
- 第100集 『寺田遺跡（第223地点）発掘調査概要報告書』 竹村忠洋・坂田典彦 編 2014年9月30日刊行
- 第101集 『平成8年度国庫補助事業（3） 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書―阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査― 寺田遺跡（第55地点）』 白谷朋世 編 2015年3月31日刊行
- 第102集 『平成24・25年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 八十塚古墳群（第145地点）』 西岡崇代 編 2015年3月31日刊行
- 第103集 『平成26年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 八十塚古墳群（第154地点） 寺田遺跡（第227地点） 山芦屋遺跡（S18地点）』 竹村忠洋・西岡崇代 編 2016年3月31日刊行
- 第104集 『平成26年度 芦屋市内遺跡発掘調査報告書 八十塚古墳群第153地点 城山・三条古墳群第118地点』 白谷朋世 編 2016年3月31日刊行
- 第105集 『平成8年度国庫補助事業（4） 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書―阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査― 寺田遺跡（第40地点）』 白谷朋世 編 2017年3月31日刊行
- 第106集 『八十塚古墳群岩ヶ平支群第61号墳出土 双龍環頭大刀 調査・分析報告書』 森岡秀人・白谷朋世 編 2017年3月31日刊行
- 第107集 『山芦屋古墳発掘調査概要報告書―兵庫県下有数の大型横穴式石室墳―』 森岡秀人 編 2017年3月31日刊行
- 第108集 『平成27年度 芦屋市内遺跡発掘調査報告書 寺田遺跡第233地点』 白谷朋世 編 2018年3月31日刊行
- 第109集 『平成9年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査

- 概要報告書―阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査― 冠遺跡（第9・10地点） 西山町遺跡（第4地点） 業平遺跡（第34地点） 小松原遺跡（第5地点）』 白谷朋世 編 2018年3月31日刊行
- 第110集 『平成27・28年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査報告書 寺田遺跡（第230地点） 船戸遺跡（第14地点） 打出小槌遺跡（第56地点）』 西岡崇代 編 2018年3月31日刊行
- 第111集 『芦屋市指定文化財 小阪家住宅発掘調査報告書』 森山由香里 編 2018年2月28日刊行
- 第112集 『平成10年度国庫補助事業（1） 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書―阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査―八十塚古墳群（第68地点：岩ヶ平支群第50号墳） 大原遺跡（第35地点） 寺田遺跡（第105地点・第106地点・第109地点） 城山・三条古墳群（第19地点：城山古墳群第18号墳）』 白谷朋世 編 2019年3月31日刊行
- 第113集 『平成10年度国庫補助事業（2） 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書―阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査―冠遺跡（第14地点） 芦屋廃寺遺跡（第55地点） 堂ノ上遺跡（第4地点）』 白谷朋世 編 2020年3月31日刊行
- 第114集 『平成11年度国庫補助事業（1） 芦屋市内遺跡発掘調査報告書―阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査―三条九ノ坪遺跡（第26地点） 打出小槌遺跡（第31地点）』 白谷朋世 編 2021年3月31日刊行
- 第115集 『平成29～31年度芦屋市内遺跡発掘調査報告書 八十塚古墳群岩ヶ平支群第59号墳 徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群（第222・230・233・236・243地点） 山芦屋町刻印石（山芦屋町113―5番地） 呉川遺跡（第32地点）』 白谷朋世 編 2021年3月31日刊行
- 第116集 『平成11年度国庫補助事業（2） 芦屋市内遺跡発掘調査報告書―阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査―金津山古墳（第11地点） 小松原遺跡（第8地点）』 白谷朋世 編 2022年3月31日刊行
- 第117集 『平成11年度国庫補助事業（3） 芦屋市内遺跡発掘調査報告書―阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査―寺田遺跡（第125地点） 津知遺跡（第21地点） 西山町遺跡（第6地点） 業平遺跡（第47地点）』 白谷朋世 編 2023年3月31日刊行
- 第118集 『令和2年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査報告書 寺田遺跡（第254地点）』 西岡崇代 編 2023年3月31日刊行



調査地現況（北西から）



調査地現況（南から）

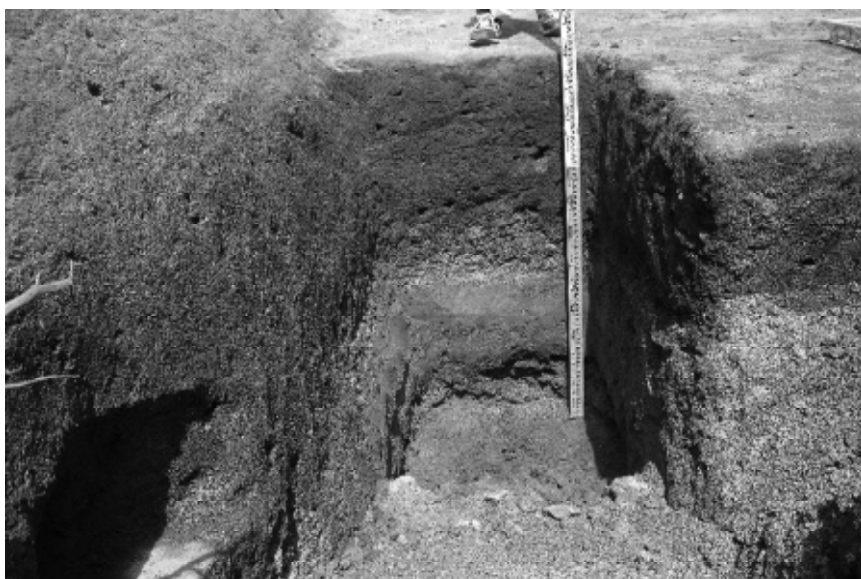
西区北壁土層（南から）



東区北壁土層（南から）



西区深掘トレンチ土層（南から）

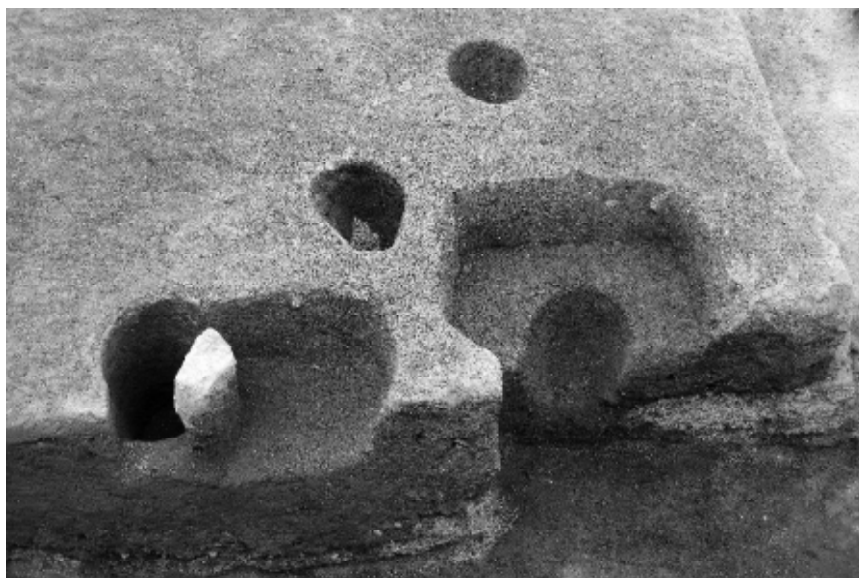




西区第1遺構面検出状況（南東から）



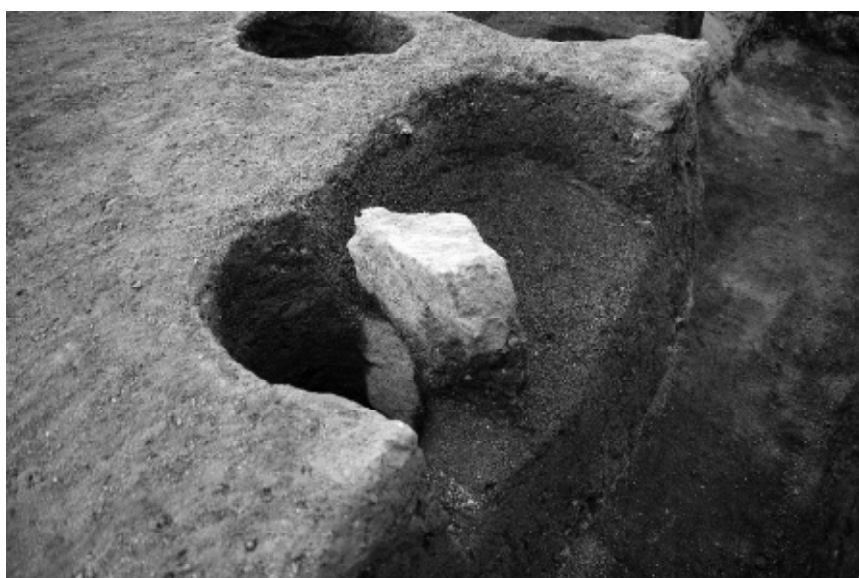
西区第1遺構面完掘状況（北から）



S 34・36 完掘状況（西から）



S 34 半掘状況（西から）



S 36 根石検出状況（北西から）



東区第1遺構面検出状況（南から）



東区第1遺構面完掘状況（南から）



西区第2・3遺構面検出状況（南から）



西区第2・3遺構面完掘状況（南から）



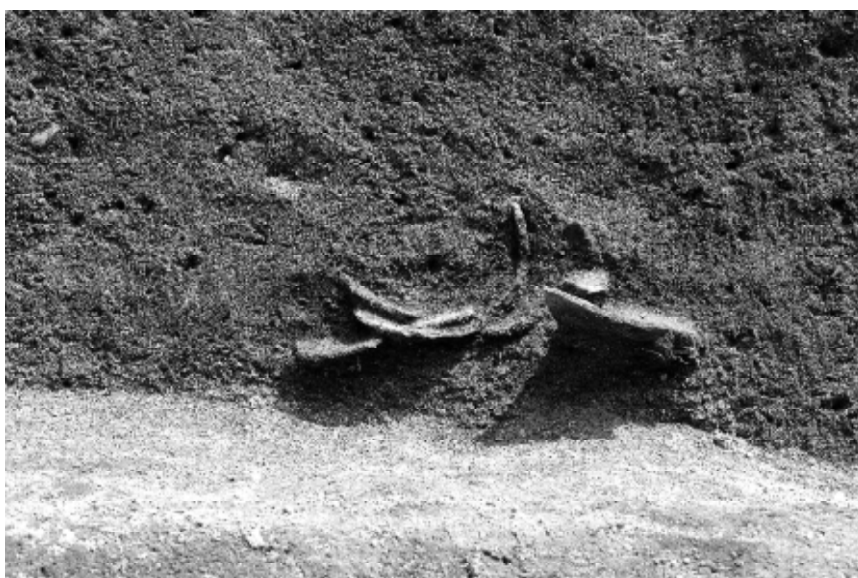
西区S H 01 検出状況（北から）



西区S H 01 土器出土状況（東から）



西区 S H 01 土器出土状況 (西から)



西区 S H 01
カマド土器出土状況 (西から)



西区 S H 01
土器出土状況 (南西から)



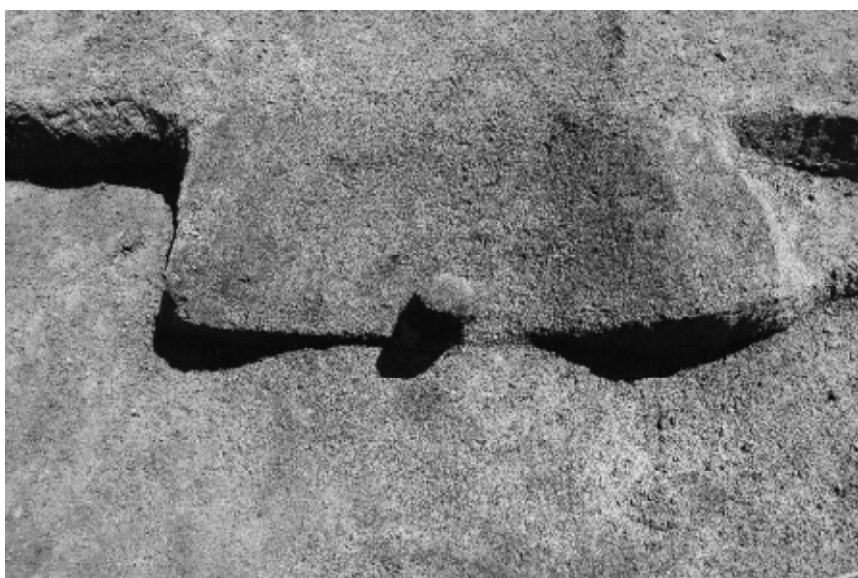
東区第2・3遺構面検出状況（北から）



東区第2・3遺構面完掘状況（北から）



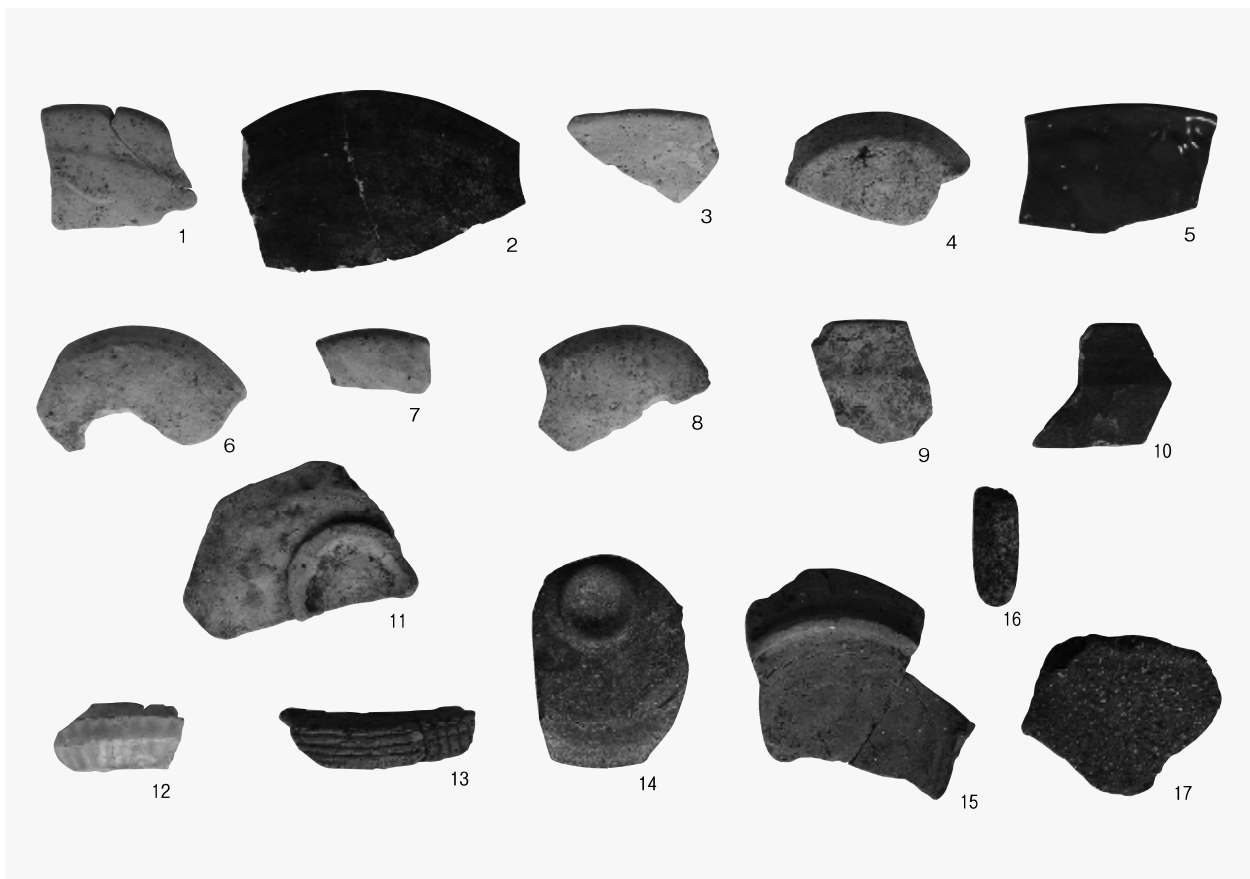
東区 S H 01
カマド土器出土状況（北から）



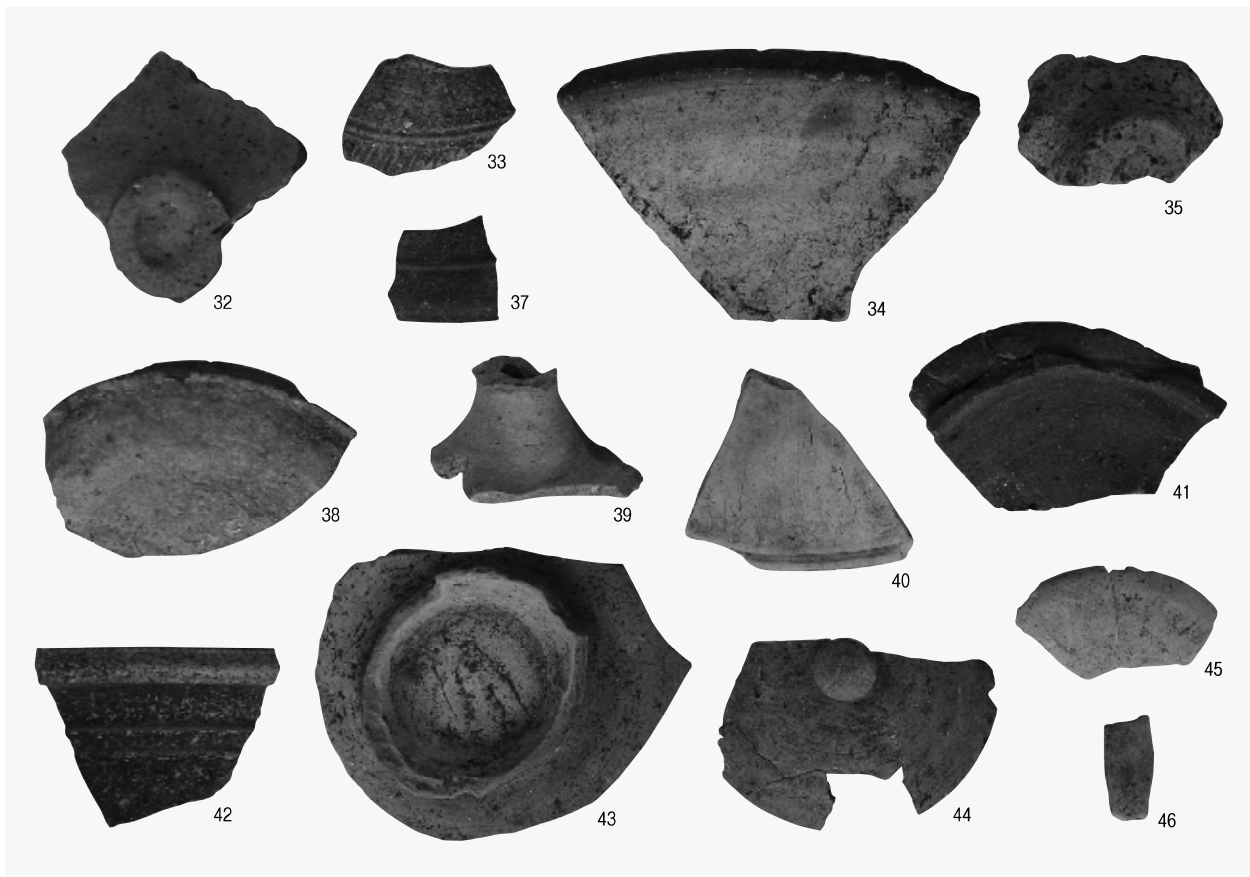
東区 S H 01
カマド支脚石出土状況（西から）



東区 S 98 土器出土状況（東から）



第1遺構面遺構出土遺物



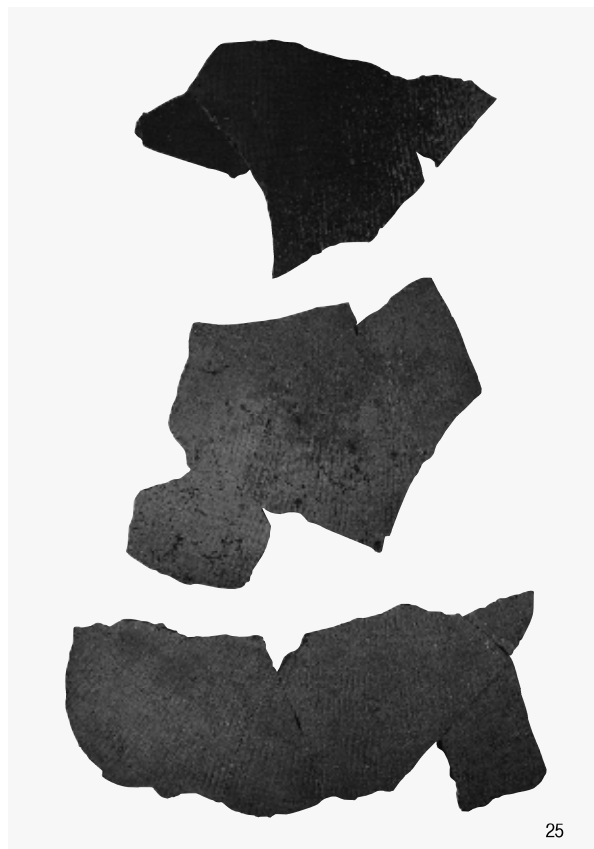
第1～3遺構面包含層等出土遺物



S H 01 出土遺物



S H 01 出土土師器甕（外面）

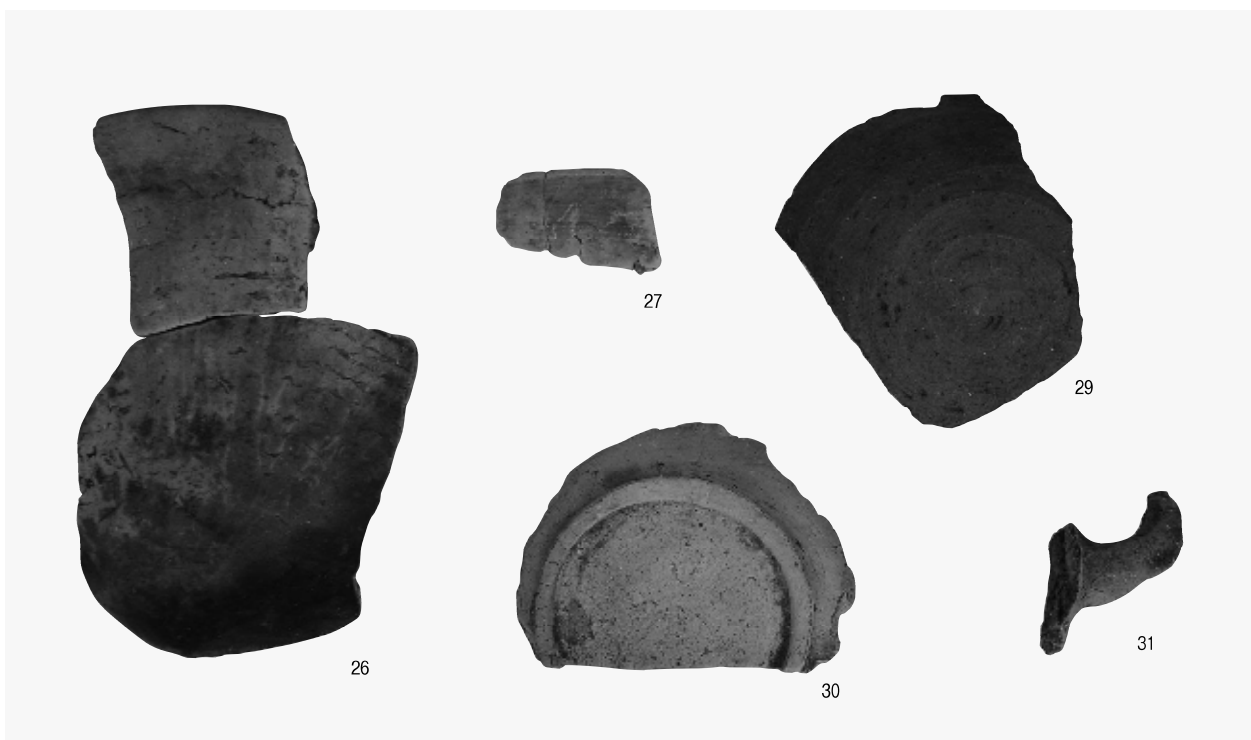


S H 01 出土須恵器甕



S H 01 出土土師器甕（内面）

- ※ 20 は、外面に細かいタテハケ、内面には粘土紐接合痕が明瞭にみられる。
- ※ 25 は、巻頭図版 2 に掲載の須恵器甕（25）と直接接合できなかった、主要な破片の写真である。この他にも、同様の破片が何点もみつまっている。



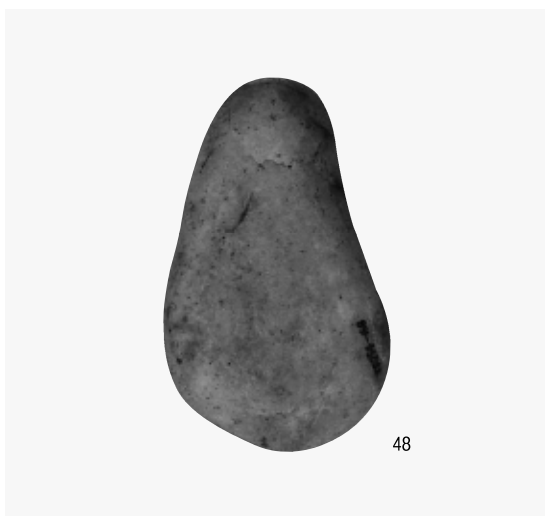
第2・3遺構面遺構出土遺物



第2遺構面包含層出土遺物



第3遺構面S 98 出土遺物



層位不明遺物（玉石）

※ 48 の玉石は、灰白色を呈するが、下部ににぶい赤褐色（7.5R5/3）の部分が散見される。

報告書抄録

ふ り が な	れいわ2ねんどこっこほじょじぎょう あしやしないいせきはくつちょうさほうこく しょ
書 名	令和2年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査報告書
副 書 名	寺田遺跡 （第254地点）
巻 次	
シ リ ー ズ 名	芦屋市文化財調査報告
シ リ ー ズ 番 号	第118集
編 著 者 名	（編集・執筆）西岡崇代 （執筆）竹村忠洋
編 集 機 関	芦屋市教育委員会
所 在 地	〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号 TEL. 0797-38-2115
発 行 年 月 日	2023年（令和5年）3月31日

所収遺跡名 ふりがな 所 在 地		寺田遺跡 (第 254 地点) てらだ いせき だいい ちてん 芦屋市西芦屋町 25 番 4 あしや しにしあしやちよう ばん 4		発掘調査担当者		竹村忠洋・森山由香里・白谷朋世	
コ ー ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調査面積	調 査 原 因	
市 町 村	遺跡番号	34 度 73 分 37 秒	135 度 29 分 79 秒	20200716 (確認調査) 20200817 ~ 20200829 (本発掘調査)	67.42㎡	木造地上 2 階建 個人住宅建設	
282065	070035						
所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項		
寺田遺跡	散布地 集落 官衙 生産遺跡	弥生 古墳時代 中世	竪穴住居跡 ピット 土坑 溝	縄文土器・弥生土器・土 師器・須恵器・瓦器・磁 器 (青磁・青白磁)・土製 品 (土錘)・支脚石・玉石	第 1 遺構面では、中世 (鎌倉時代前半) の 柱痕を有する 9 基のピットを検出した。中 には、掘立柱建物を構成するピットもある と推測されるが、建物は復元できなかった。 第 2 遺構面では、古墳時代中期のカマドを 伴う竪穴住居跡を 1 棟検出した。カマドや その周辺からは、残存率の高い土師器甕や 須恵器甕がみつかった。また、被熱痕跡の 顕著な支脚石も出土した。第 3 遺構面では、 S 98 からほぼ完存の弥生土器鉢が出土し たことから、弥生時代後期の遺構面と判断 した。		
要 約	合計 3 面の遺構面を検出した。第 1 遺構面は中世 (主に鎌倉時代前半)、第 2 遺構面は古墳時代前期から中期が主体、第 3 遺構面は弥生時代後期を主体とする遺構面である。なお、南接する寺田遺跡第 127 地点で検出されている遺構面と、本調査地点の各遺構面とは年代的に合致するが、親和性のある遺構は検出されなかった。						

芦屋市文化財調査報告 第118集

令和2年度国庫補助事業

芦屋市内遺跡発掘調査報告書

寺田遺跡（第254地点）

令和5年（2023）3月31日 印刷発行

発 行 芦屋市教育委員会
〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号
TEL. 0797-38-2115

印 刷 有限会社 リーストワーク
〒651-2144 兵庫県神戸市西区小山3丁目11-5
TEL. 078-904-6510

Ashiya Archaeological Record 118

2023.3

Ashiya City Board of Education, Japan